目次

日蓮主義と實際問題（時言）……本多日生
一、日蓮主義と國體來……二、國民自覺の內容……三、國民の自覺と哲學……四、國民の自覺と倫理……五、國民の自覺と宗教……六、國民の自覺と國家觀……七、國民の自覺と社會觀……八、國民の自覺と文明觀……九、精神生活の高調……一〇、日蓮主義と國體擁護……一一、日蓮主義と蒙古來……一二、一心協力と自由……一三、日蓮主義の教化
聖德太子の憲法に就て……本多日生
世の中と佛教……野澤悟吾
佛教信仰の正統……本多日生
迷信を排す……本多日生
人生問題と精神生活……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日成
私の婦人觀……安西千賀夫
記事、報道十數件

第廿四年十一月號

統一第三百七號　明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可　大正九年十一月二十四日第三種郵便物認可　發行所東京市品川町品川四百十二　發行人　（本誌定價一部）

謹告

時代の要求に鑑み、法國の爲め貢献仕り度今回統一團名古屋支部豐橋分會を創立し、十月十五日を以て豐橋市清水妙圓寺に於て、總裁本多日生猊下の親臨を仰いて、發會式並に大講演會を開催仕候條、大方の同志諸君に於ては、何卒祝辭又は祝電を寄せて本分會の前途に聲援を與へられ度茲に統一誌上に於て懇願候也

大正九年九月
豐橋市清水妙圓寺
統一團名古屋支部
豐橋分會創立事務所

思想の惡化善化
人類文明の基礎
正しき理解と信念
各一部金六錢百部以上五錢の割送料一部金貳錢
本多大僧正撰
法華經要文
一部定價金參拾錢
並製金五拾錢
上製金四錢

本多日生師著書一覽

○法華經の心髓　壹圓六拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○聖訓要義　卷一、二、三、四、五既刊、壹部金壹圓七拾錢　卷六壹部金參圓
○開目鈔詳解　上卷一部　金貳圓
○聖語錄　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の初步　金七拾錢
○東洋文明の權威　金壹圓八拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓各送料八錢
○法華經講義　上下上卷下卷各一部金參圓四拾錢送料金貳拾四錢　一部金參圓四拾錢十一卷完既刊送料一部十八錢半年前金送料不要
○大藏經要義
購讀希望の方は左記へ申込みなるべし
東京市外品川妙國寺內
大藏經要義刊行會　振替東京三一五九六番

伊勢國四日市市安樂寺建立淨財勸募之辭

寺は精舍なり、人心を清淨ならしむること、米を精白にするが如く、又寺は功德林なり、この處に詣ずる者は功德を成就すること、園林に入つて華果を採收するが如く、復寺は金剛道場なり、この處に詣づる者は金剛不壞の佛身を成就す、經に云く、佛寺を建立する處は、其地皆金剛より成り、異滅の變あること無しと、今茲に伊勢の國四日市市に於て、法華經の正義を尊重する信男信女等、心を協せて一寺を建立せんとす、幸に靜岡縣下に存する久根の安樂寺を移して、其寺號を襲用せんとす、安樂寺は醍醐法皇の建立にして由緒正しき梵刹なり、建立の計畫已に成つて將に造營に着手せんとす、希くば隨喜の諸氏この擧を贊助し淨財を喜捨し、以て發願を成就せしめられんことを

維時大正九年九月

發願人　本多日生
國友日吉
山路元治
兒玉良
佐藤小柳
服部隆

寄附金勸募要項

一、敷地　金五千圓也
一、本堂兼庫裡七拾坪　金壹萬圓也
一、工事着手　大正九年拾月
一、寄附金は東京府品川町妙國寺、名古屋市新榮町常德寺、又は四日市市新丁向山路方統一團分團宛申込及納付ありたし、

山路元吉寄附

日蓮主義と實際問題

本多日生

目次

一、日蓮主義と國難來……二、國民自覺の內容……三、國民の自覺と宗學……四、國民の自覺と倫理……五、國民の自覺と宗教……六、國民の自覺と國家觀……七、國民の自覺と社會觀……八、國民の自覺と文明觀……九、精神生活の高調……一〇、日蓮主義と國體擁護……一一、日蓮主義と蒙古來……一二、一心協力と自由……一三、日蓮主義の教化

一、日蓮主義と國難來

日蓮主義は見方に依つては佛教中の一つの宗派でありますけれども、他の方面より考察しますれば、日蓮主義は日本國民の思想を善導する模範的の教義を示して居るものである。殊に日蓮聖人の力を畫された點は、その當時に於ける我が國難を憂へて、この國難を除く事に努力せられたのであります。即ち他の言葉を以て申せば、日蓮主義は古い經文の議論に沒頭せずして、其の時代に横はつて居る實際の問題に對して、之を解決し之を指導すべく努力する所のものであります。それ故に

若しも大正の今日に日蓮聖人が出現せられましたならば、必ずや現在の國難に對し、目前に横はつて居る問題に對して、之を無決すべく、之を指導すべく、堂々たる意見を御宣言なさるべきは火を踏るよりも明かなことであります。我々不肖なから日蓮聖人の教旨の下に働く者は、日蓮聖人のこの御精神を奉戴して、今日の實際問題に對して努力するが、日蓮主義者の本領であらうと信じます。

二、國民自覺の内容

今日我國に横つて居る實際問題は何であるかと言へば、健全なる國民の自覺を要する事であります。今日自覺の聲は高いが、其の内容が或は淺薄であり、或は方向が誤つて居ることが多いのである。公國で酒樽を拔いて自覺を叫んで居る時、果して日本人としての健實なる意味合を有つて居るでありませうか、健實なる自覺と云ふは、深遠なる哲理の基礎に於て考察を遂げなければならず、又公正なる倫理の規範に基かなければならず、健實なる宗教の信仰を有して居る所の自覺でなければならぬ、又國家存立の意義、社會構成の原理、或は理想的文明の意義に於て、最も嚴密なる攻究を遂げての自覺でなくてはならぬのであります。若しも是等のことを除いての自覺、唯だ我等の生活樣を絶叫し、我等の目前の利益を漁るが爲に叫ぶのでありましたならば、左樣な自覺は全く淺薄なる觀念の産物であります。我が國民の有する自覺は左樣な根據なきものであつてはならぬ。

三、國民の自覺と哲學

今日の國民的自覺は、東西古今の哲學に査覈して誤りなしと云ふ、哲學上の承認を經たものでなくてはならぬ。例へば唯物論のやうな淺薄なる思想の上に自覺を叫ぶのであつたならば、東西古今の哲學上の批判から見て無論淺薄言ふに足らざるものであります。然るに左樣な哲學上の批判などは棚に上げて、「先づパンを與へよ、此の生活の不安を如何にする」と云ふやうな事のみを叫んで居るのであつたならば、それは其の自覺が淺薄だと言はれても仕方がなからうと思ふ。何時の間に哲學者が唯物論のやうな淺薄なる思想に降服し去つたか、勿論考への無い左樣な人も一人や二人はあるかも知れぬが、私は東西の文明に於て、唯物論の爲に深遠なる哲學が破られたことを未だ知らぬのである。唯だ經濟運動、勞働運動、薄つぺらな政治運動に熱狂して居る人が、左樣なる淺薄な思想の根據に於て騒ぎ立てるのである。故に深遠なる哲學上の批判を經た時には、それ等の自覺は、根據の無いものであると云ふことが斷定されるのである。既に其の思想の根據が打破せられたならば、根抵なき上に於て、踊り躍ねて居ることは、總て是れ意義なきことが明かになる次第であります。

四、國民の自覺と倫理

又我が國民の自覺は、公正なる倫理の規範に依つて導かれなければならぬとしたならば、無論此の放縱奢侈、無節制なる所の運動を贊成することは出來ない、自分の言ふ所、行ふ所は、一に倫理上の承認を經て、倫理の觀念に於て承認せられたものでなくてはならぬ。何時の間に高潔なる倫理の觀念を葬むり去つて、さうして唯だ生活の問題、パンの問題のみに人が熱中して宜いと云ふ、左樣な倫理的の結論を得たのであるか。倫理上の承認を經ない運動は價値なきものであると云ふことも、是は論ぜずして明かである。

五、國民の自覺と宗教

又健全なる社會を構成する上に於ては、無論宗教の信念を尊重しなければならない、何時の間に宗教無用論の立場に降服したのであるか。成程大分古い時代には宗教の必要が分らないで、宗教必要なりや否やと云ふやうな事で間誤々々して居つ

たけれども、それは今より十年前若くは十數年前より、宗教の必要と云ふことは最早や定論となつて疑ふ人もなかつたのである。それが勞働運動などが起ると同時に、折角必要を自覺して居つたものをば、何時の間にかそれを擲つて、宗教の信仰などの問題はそつち除けにして騒ぐと云ふのは、是れ亦どう云ふ譯であるか、どうも私は其の思想の根據なきに驚くと共に餘りに思慮が無さ過ぎるのに呆れるのである。

六、國民の自覺と國家觀

又我が國民は國家存立の本義に就ては、十分正鵠を要する譯であるが、今日の運動が往々にして國家觀念より遠ざからんとして居るのは事實である。纔かに口に國家と云ふことを言ふにしても、その熱狂する原動力と云ふものは、個人の利益を本位にして居ることは明かである。精明する道は幾つもあらうけれども、之を爲はらざる淨玻璃の鏡を以て照したならば、其の多くの運動は愛國的觀念の發露に非ずして、個人の利益に熱狂して居る所の低劣なる運動である。それは國家存立の意義に關して不透明な頭腦に陷ぢて居るからである。無論西洋の國家に就ては、國家それ自身が存立の意義を明かにしないやうな國家もあつたであらう、或は間違つた觀念を有つた國家もあつたであらうけれども、我が大日本帝國は左樣な曖昧なる國家ではない、邪念などを有する國家ではない、理義正明、吾々の祖先は此の國家の理想を奉じて、命を捧げて擁護し來つたものである、何時の間に此の尊き國家の觀念を擲ち、譯も分らぬ思想にかぶれたのであるか、左樣にして國家觀念を破壞して行くことを自覺と呼ぶに至つたか、それは即ち空論妄說と云ふものである。國家の存立を尊ぶならば、國家には無論統率を第一とするのである、國權を固くして其の國家の理想に服從し、國家の目的に參加し、國民個々の考へはあるにもせよ、利害の衝突はあるにもせよ、國家の大事の下には其の利益を犧牲とし、自分の觀念を捨てゝ國家の大事に參加しなければ、國家の存立を全うすることは出來ないではないか。所が唯だ自己の利益權利のみに醉つて騒ぎ立てる時には、知らず識らずの間に國家の基礎を弱め、遂に國家をして崩壞に導くことは、東西の歷史に於て明かなことである。斯かる意味に於て左樣な淺薄なる根據なき自覺を叫んで居るものは、自覺に非ずして更に一層激しく昏醉しつゝあるものと私は言ひたいのである。そんなことで何の自覺があるか、個人の利益に熱狂して、國家の存立を忘れる事ほど、醉つぱらひの仕方はないではないか、酸つぱらひも〳〵宿醉ではないか。

七、國民の自覺と社會觀

又社會構成の原理は何處にあるか、彼等の多くは社會の多數の利益幸福を保證しなければならぬと言ふが、最初言ふたことと今考へ込んで居ることとは矛盾して居る。眞に自覺したる者は決して前後の考が矛盾しない、夢を見て居る者とか、とぼけて居る者は、前に言ふたことと後に言ふこととの間に連絡がない。思想の連絡のないものを自覺とは言ふことは出來ない、彼等は何を叫んで立つたか、世の中の多くの人の幸福を保全せねばならぬ、全體の幸福を保全せねばならぬと言つたではないか。然らば其の全體の爲には有らゆる方面に行渡るやうに考へて見なければならぬ。例へば勞働運動にしても勞働者の方面のみ考へて行くが故に、國民の利益が破られる、自己の利益のみ考へるが故に、國家の隆運を阻碍する。是れは明白なる事實である。其の最も著しく現れたるものは、英吉利に於て是を見れば分る、英吉利は非常に自由を與へ、民權を尊重して來た、頗る寛大なる政治を執つた國家と稱せられ、國民も頗る穩健なる美風を有すると言はれて居つたのであるが、それが昨年末に起つた三角同盟のストライキを見ると、一週間にして倫敦の市民を乾ぼしにすると云ふことを目的にして勞働者が騒いだのである。玆に於て倫敦の市民は、一齊に立つて勞働者を攻擊した、政府も勞働者を敵とし、あらゆる新聞は悉く勞働者を敵として戰つた、それが爲に漸くにして凹んだのではないか。勞働者は相當な人間の數はあらうけれども、國民全體から見たならば少數者である、我國に就て考へて見ても、假に勞働者を二百萬人と見ても、日本國民は六千萬人で

ある、二百萬人は六千萬人に對して何十分の一であるか、左樣な少數者の爲に國民全體の安寧を脅かし、干乾にするとか餓死さすとか云ふやうな騒ぎをするに至つては、全體の幸福を標榜して立つた運動としては大なる矛盾である。まだ激しいことがある、多くの運動を見たならば、言ふ事と行ふ事、標榜したる事と結果とは全く違つて現れて來るのである、然るに其の予盾に氣が附かないと云ふに於て、決して自覺ではない、醉つぱらいも〳〵も泥醉者である、知覺を失つて居る無能力者である、達觀したる觀念を以て見たならば、彼等の言ふことゝ行ふことゝ其の結果とは、全で違つて居る。社會の構成せられて居る原理に就ては、どうしても仁慈謝恩の念と云ふか、一方は優しい考を有つて他を助けて行く、助けられたものは其の恩に感じてそれに報ゐると云ふやうな、親切と恩を感ずる觀念の結び合せに依つて社會は出來るものである。所が今の運動は戰ひを宣言して居る、勞働運動とは何ぞ、資本家に對して戰鬪を開くのであると云ふ戰鬪團體である、「おのれ其の分にして置くものか、張り倒せ」と云ふのである。それをストライキが合法であるとか、眞理であるとか言つて居るが、それも受賣りである、ストライキが何が故に合法であるかと云ふ事を能く考へたならば、決して徒に其の言葉を認めることは出來ない、最も溫良なる方法に於てあらゆる手段を盡して資本家も分らず政治家も分らず、國民も分らん、セツパ詰つたと云ふ時に業務を休んでその反省を促す、併しながら斷じて暴力などは用ひないと云ふやうな、極めて穩健なる方法に依つて少し計りやることに於て、どうか斯うか認められるか知らぬけれども、始からねぢ鉢卷に腕捲りをして飛び出すと云ふやうなストライキならば、徹頭徹尾不合法不眞理なものである。所が合法と言つたら「ソラ合法ぢや」と言ふので、初めから大威張りで行くといふやうな風でやつて居るのである。それであるから今日まで行はれ居るストライキは、總て不合理なものであり、總て罪惡なものである。何處にストライキの合法なものがあるかといふことに就て、十分に研究してやり居る者があるか、日本などはストライキの未だ嚆であるが、最初から鳴聲がさつぱり成つて居らぬ。後に事實を擧げて私がそのことを證明するが、目茶々々である。ストライキは充分に注意せんければ、ちよつと應用を誤まれば總て罪惡である。然るに其の注意を怠つて無謀にやるのであるから、今日のストライキの如きは、一から十まで罪惡である。それは私が事實を以て證明する。それ故に社會を構成する所の原理に反して、世の中をして益〻危險な狀態に導き、不安の狀態に導く、例へば工業家から言つたならば、何時ストライキが起るか分らぬ、又職工の方から言つたならば、何時會社が閉鎖されて自分等が職を失なひ、路頭に迷ふか分らぬといふことになる。一般國民から言つたならば、物價の安定を得ない、是れからどうなつて行くか分らぬといふやうになる。今日は世界的にストライキをやるものであるから、亞米利加でも甚だしいストライキをやつて居るが、亞米利加でストライキが起れば錢を掘らないから、隨つて錢が日本に來なくなる、さうすれば日本の工場は、造船所をはじめ總て一遍にまいつてしまふ。又石炭を掘らぬといふことをやるから、あらゆる工場は何等あつても仕事が出來ない、日本の船にして見た所が、今運輸業をやつて居る者の一番の心配は何であるか、船に荷物を積んで亞米利加に送つた所が、うまく歸りに石炭があつて歸つて來られるだらうか、向ふで賣になつてしまひはしないかといふことを氣遣つて居る。さうなつたら算盤が持てんじやないか、向ふに品物を持つて行つても、亞米利加の港で石炭を積めんといふ事になれば、その船はそのまゝ賣になつて歸つて來ることが出來ない、是れはみなストライキが人類の幸福を阻碍して居る次第である。日本でもやはりその通りで、例へば日本のマツチならマツチが支那に行つて、支那人が安いマツチを使つて居るといふ時に、日本のマツチ工場がストライキを起して仕事を止めてしまへば、支那の方ではマツチが高くなつて、マツチを使ふことが出來なくなつてしまふ。總ての工業作品といふものは、國民の幸福、人類の幸福の爲に行はれて居るので、資本家の爲でもなければ勞働者の爲でもない、我慾の爲に仕事をして居るものではない、總ての生活を豐富にして人類を幸福にせんが爲に工業商業は營まれて居るのである、工業は利益の爲ぢや、商業は利益の爲ぢやといふ、その觀念が抑〻間違つて居る。凡そ人間の行爲は總て人類の幸福、國民の幸福を前提としなければならぬのである。

八、國民の自覺と文明觀

又理想の文明と申しますか、如何やうに人類は文明を進めて行くのであるかといふ目標について考へたならばどうであるか、今日の自覺の叫びはそこに宗教をも認めず、道德などのことも考へず、唯だ之をパンの問題にのみ熱中せしむるのであるが、吾人の造り成す文明はさういふ淺薄なるパンにのみ流れて行つて宜いものであるかどうか。翻つて個人の慾望若くは家庭の生活について考へてごらんなさい、人間は唯だ食へさへすれば宜いといふものではなからう、必ずそこに精神の崇高なる滿足を要求するものであつて、それが或は宗教の信仰となり、或は音樂の趣味となり、或は色々な善をなして樂しむやうなことになつて、精神的生活を營むといふことが、最も人類の華である。「人間は唯だ食へさへすればいゝんぢや」と言つて、唯だ飯を食つて何にも外の事を考へんでもいゝといふやうなことに世の中をしてしまつたならば、實に落漠たるものであつて、是れ程慨はしい事はない、人類の不幸是れより大なるものはないのである。然るに今日の自覺の叫びは、一切の問題を拂り去つて、唯だ物質生活の一點にのみ集中して來るのである。是れは食へぬから仕方がないといふけれども、左樣にして人が食ふことばかりに熱中する結果、物價も騰貴し、そこに樣々なる事情が錯綜して、遂に生活の不安を來たすのである、慾張り根性を突張つたらうまく行くかといふと、慾張りと慾張りとが出合ふが故に、總て生活が不安になつて來るのである。今少し此の我慾の精神を制限せんければ――パンの問題にのみ熱中する、この間違ひを冷さぬ限りには、とてもうまくは行かぬ。近い所で考へたら直ぐ分る、例へば家族に於ても、親類に於ても、慾張りばかり寄つて居る、さうして少しづつでも引たくるといふので、親なら親が死んだ、遺產の分配についても、鷄の目鷹の目で喧嘩をするといふ者ばかり寄つて來たならば、朝から晩まで喧嘩をして、商賣もしなければ飯も炊かないでやつた時には、腹が減つても飯が食へない、商賣も儲けも出來ないぢやないか、唯だ我慾にのみ熱中して、ストライキをやつたり喧嘩をして居る、その間といふものは業務を休んで居るから、總ての生產はなくなつてしまふ、親類が商賣を休んで取つ組み合ひをして、遺產の分配で噛み合つて居るのと同じことである。又それが濟んだかと思ふと、外の奴が來て又取つ組み合ひをやるといふ譯で、しまひには遺產などを費拂つて見ても、その遊んで取つ組合ひをして居つた間の勞賃代や何かを仕拂つたら、未だ借金が殘るといふことになる。さういふことをやつて居るが爲に、各國とも此の生活の不安に陷ぢたのである。日本でも相和して職業を勵んで行つたならば、決して生活の不安は來ない、けれども斯の如き勞働爭議を以て、或はサボタージュとかストライキとかいふやうなことをやつて居つたならば、必ずや生活の困難が來る。それは來る苦ちやないか、例へば博奕を打つて何にもせんで遊んで居つたならば、四圓づゝ持つて居る奴が三人寄つて三日なら、三日三人が博奕ばかり打つて、飯を食つたり蕎麥を食つたり、蠟燭の代を拂つたりしたら、しまひには金がなくなつてしまふ。サボタージュといふのは、大きな博奕を打つよりもつと、ひどい、何千人といふものが惰けた結果といふものは、借金が殘るにちがひない。それをあつちでもやりこつちでもやるのだから、うまく行く譯がない、そんなことを合法だなどと言つて騒いで居る、詰らんことちやないか。それであるから無論物質生活も大切だけれども、それと同時に、若くはそれ以上に人間は精神生活といふものを尊ばなければならぬ、少々食ふものはまづくとも、夫婦仲が宜いとか、家庭が圓滿であるとか、其の精神的生活を加へて、人間は滿足を得て行かなければならぬ。一切を物質の滿足のみに求めた時に於ては、いつも不滿なものである、三度々々御馳走を食つたからといつて、それで決して人は滿足せられるものではない、平生まづい物ばかり食つて居る者から見たならば、たまに刺身でも食つたら美味いと思ふけれども、三度々々刺身を食ふといふことになつたならば、なんにも美味いものではない。「一遍澤庵でも食はして呉れ」といふことになる。西洋料理でも稀に御馳走になるならば、美味いけれども、三度々々五日も食はされてごらんなさい、「どうぞ一遍茶漬を食つて見たい」といふやうなことになるもので、そんなことは何でもない。煙草でも葉卷一本五十錢のをポカ〳〵吸つて居る、初めはそれで滿足だけれども、それが慣れたならば「君は毎日五十錢の葉卷を吸ふて居るから滿足

だらう』『なに素卷を吸つたつて滿足があるものか』といふことになる。何でもみなさうである、汁粉でも偶に拵へるから美味いと言つてみんなが食ふけれども、毎日々々食はされたならば、『君は毎日好きなお汁粉が食へて羨しいな――』『馬鹿を言ふな、汁粉ばかり食はされて滿足が出來るか』……人間はさういふもので、物質生活の慾望といふものは幾らやつても慣れば直ぐ不滿足がそこに起るのである。それが分らぬから、何でも慾張りさへやつたら宜いと言ふけれども、別莊なら別莊に行つて御馳走を拵へて食つて居る、料理の上手なコックを連れて行つて食つて居るけれども、終ひには口についてしまつて仕方がない、何か違つた詰らぬものでも貰ふと『是れは珍らしい』と言つて喜んで食ふ。人間といふものは、さういふやうな事に於て騒いで居る程、愚かなことはない、全然食へぬといふことになれば大問題だけれども、さう云ふことは滅多に起らぬ。慾望を制限しさへすれば、必ず食つて行ける。唯だ自分のさういふ我慾を突つぱつて行くと、それは一日に十圓づつの御馳走を食つても滿足は出來ない、一圓づゝでも滿足しやうと思へば滿足は出來る。吾々は決してまづい物ばかり食つて居れとも言はんけれども、或る程度に生活の欲望は制現せんければならぬ、さうして精神の滿足を以て之を導いて行くことが、理想の文明であらねばならぬ。

九、精神生活の高調

果して日本人の自覺は、この精神生活の叫びが高いかどうか、勞働運動の中にも精神生活を高め、政治運動の中にも精神生活を高調しなければならぬ。彼等が芝公園に集つて酒樽を拔いて叫び居る中に、この精神的自覺があるか。恐らく無いだらう、それでは駄目ぢやないか。抑々酒樽など拔いてやつて居ればやはり借金になる、借金にならなくとも外の國から金を貰ふたりする。言論の時代と言ふならば、そんなにワイ〳〵言はなくとも、『正義のある所一人之を唱ふれば天下之に從ふ』といふやうにして行かなければならぬ。旗などを立てゝワイ〳〵言つて、示威的に脅迫がましいことをやつて行くのは野蠻の行爲である。進歩せる文明的の行爲といふものは、さういふものではなからう。冷やかに壇上に立つて說を述べて、靜かに聽いて賛成すべきものは賛成する、不賛成のものは默つて歸ればそれで宜い。それを唯だワイ〳〵言つて、何んでもない事にちよつと『反對黨』と言つたから不都合だとか、『煽動政治家』と言つたのは不都合だと言つて、言葉尻りを捕へて撲り合ひをするといふやうなことを議政壇場でもやつて居る。こんなことが憲法政治か、憲法政治といふものはさういふものではなからう、掴り合ひの政治をやるならば、初めから議論などしないで棒を持つて出て毆りあつて、强い方が勝ちだといふことにすればそれで宜い、言論でやるならばそんな暴力などを用ひるのは、絶對に禁物でなければならぬ。であるからどうも今の文明の導き方は、神聖なる自覺を有つて居らぬと斷言しても差支へないのである。

斯樣に見來ると國民自覺の內容が甚だ淺薄である、哲學の理義より考へても、道德の規範より考へても、宗教の信仰より又は國家存立の意義より考へても、社會構成の原理より考へても、理想の文明から考察しても、みな外れて居るとしたならば、斯ういふ大きな問題から否定せられるやうな自覺は薄つぺらと言はれやうとも、方角が間違つて居ると言はれやうとも辨解の言葉はないであらう。何にもそれは根據がなく、左樣にして唯だ慾張り根性と淺薄な思想とのワイ〳〵だけを力にして、さうしてやらうといふ、左樣な自覺に價値があらうか、此の重大なる時機に於て國民が自覺を起すとしては今申すやうな大事な事柄に省みて、其の思想の根據に哲學からも承認せられ、道德からも、宗教からも、あらゆる重大なる事から見て間違ひないといふ見込がついて、はじめて發揮すべきではないか。

一〇、日蓮主義と國體擁護

玆に日蓮主義の關係が起つて來る、日蓮主義は當時國民の自覺を叫んだ最も熱心なる運動であつたのである。當時政治家宗教家、國民一般が、內には國體の破壞せられることを思はないで、鎌倉の勢力に附いた、北條義時が戰ひに勝つて京都

の勢力を全滅するに至つて、世は鎌倉の天下となつて、さうして飛ぶ鳥を落すといふ勢力を得た爲に、學者でも宗教家でも人民でもみな鎌倉の方に頭を下げる事になつた。天子樣は島流しにおなりなされ、後鳥羽院は隱岐の國に、順德天皇は佐渡ケ島に、土御門天皇は土佐の國に、又皇子方は但馬にいづれも流され、朝夕朝廷に仕へし公卿百官は、東海道に於て首を刎ねられてしまつて、京都全滅の姿になつた、その當時國民は勢力のある所に附いて、世は鎌倉の天下となつた、坊主はじめ鎌倉へ降つて、今まで朝廷の爲に祈つて居つた坊主も北條の武運長久を祈るに至つた。百姓どもは譯もなく唯だ租稅でも安くなれば、鎌倉の天下太平を祈るといふことになつて、自己の利益の爲に我が國體を忘れたのである。その時屹然として起つたのが日蓮である、「何事であるか、如何に鎌倉が勢力があらうとも、日本の國體を破壞するとは容易ならぬ、殺れ北條何者ぞ、元これ伊豆の國の土民の子ではないか、權の大夫は民ぞかし」と、鎌倉の大町小町の辻に立つて、大聲疾呼して、熱烈に勤王の大義を說き、國民の自覺を促がされたのである。

一一、日蓮主義と蒙古來

又其の當時大元蒙古が我國を襲ふて來るといふことが聞えた、我國が一番危なかつたのがこの蒙古襲來の時である、蒙古は非常な勢力を得て支那全土を蔽卷して居るのみならず、ずつと今日の露西亞の半分を取つてしまつて居るし、印度に這入つて北天竺も取つてしまふ、今の獨逸の國境までも、又亞細亞土耳古も占領してしまつた、朝鮮も取つてしまつた、非常にえらい勢ひを以て、さうして「日本は目障りちや、やつつけてしまへ」といふ勢ひでやつて來たのである、實に危險なことであつて。その時に日蓮聖人が、「蒙古襲來のことに備へなければならぬ、唯だ國民が我慾の觀念ばかり有つて居つてはならぬ、國を思ふの志を有たなければならぬ、自己の利慾に醉つて國を忘れてはならぬ、宗教の信仰に囚はれて國を忘れてはならぬ、是れ共に非なり」と言つて、大いに國民に愛國の觀念を鼓吹された。今日は同樣が違ふやうでも、やはり同じことである、國內に於ける勞働運動は、自己の利益にのみ熱中して、國家の大事を忘れることになつて行く。今の民心が動搖するのも、北條時代に個人の利益の爲に、我が國體の破壞を念としなかつたのも、その事柄は同じである。

又他面には世界の大勢である。國際聯盟は出來て居るけれども、國際聯盟にのみ信賴し難い、無論日本は國際聯盟の參加者として、飽くまでも世界の平和を維持すべく努力するけれども、併しながら戰端といふものは日本が如何に平和を希望して居つても、已むを得ん事が起るものである、この事を國民が自覺しなければならぬ。又武力の競爭でなくして、經濟上の競爭が强い勢ひで起つて居る、郵船會社なら郵船會社の航路に對しては、船錢交換で亞米利加から錢を貢ふ代りに、船を滿めて置いて、亞米利加が日本の郵船會社の運賃の半額で輸送を開始する、誠に皮肉なやり方ではないか、さうして「錢は亞米利加の勞働者がストライキをやるから送られませぬ」と言ふ。それで支那の方に於てはボイコットをやる、西伯利亞の方は過激派が跋扈して、今は浦潮までも占領して、日本の援けて居つた政府の役人は、船に乘つて逃げて來たけれども、日本に上陸する費用もないから、乘つて來た船をたゝき賣つてどこかに逐電しやうかと考へて居る。この激しい波風が起つて居る時に、東洋の盟主たる日本は何の暇があつて間誤々々して居るか、この世界の大勢に盲目になつて、唯だ目前の自己の利益權利のみに熱中するといふは何事であるか。どうしても日蓮の叫んだが如くに、外世界の大勢に對して、國民は一日も愛國の觀念を忘れてはならず、內には國體を擁護する忠節の觀念は、如何なる場合にも忘れてはならないのである。

一二、一心協力と自由

西洋では自由といふことが意義のあることであらう、歷史的系統的に尊い德目であらうけれども、日本に於ては自由といふことが第一義ではない、日本は自由よりも第一義は一心協力——億兆心を一にする所にある、我が大和民族は個人の自由よりは、國民全體が同心協力して國家の目的に奏す點にある。それは政治上の小さな壓迫に對しては、壓迫を解くことが自

由ならば、それは壓制は除くが宜いけれども、如何なる場合にも、自由の叫びを擧げたならばそれが一番えらいことのやうに思つて、自由のお、、、ミコシを擔いで廻つて居るのは、決して感心したことではない。

一三、日蓮主義の教化

左樣にしてどうも今日の自覺に對しては、日蓮主義が指導者となつて、深い哲學上の觀念、又意義ある道德上の規範、宗教の信仰、その他國家の存立、社會の構成、理想の文明といふやうな大きな問題から、彼等を導いて行かなければならぬと思ふ。今日の議論は「小人閒を好む」の端である、甚だ慨嘆すべきことである。（未完）

聖德太子の憲法に就て

本多日生

こゝに聖德太子の憲法に就て大體の御趣意のある所を紹介致し、間々自分の所見をも加へてお話をしやうと思ふのであります。我國思想界の狀態に就ては、屢〻論じた如く、餘りに西洋の文明に盲從し過ぎたことが今日の憂ひを爲したと思ふのであります。無論文明は孤立であつてはならぬ、他の國に善きものがあれば之を採つて用ゆるといふことは言ふ迄も無いことでありますが、それは我國にありし善きものを保存しつゝ更に新しきものを加へて行かなければならぬのであつて、その國に發達したる善きものを捨て、之を忘れてさうして他の未だ善いか惡いかハツキリしないやうな、疑問のものを輕卒に採用致しますれば、必ずや失敗を免かれない譯であらうと思ふ。これは横に申せば國と國との關係で、東洋西洋といふ言葉で分れるのであるが、縱に時の關係で申せば、即ち今と昔であつて、新しいとか舊いとか云ふ事である、これも亦同じやうに現代人は輕卒なる態度を取つて、新しいものは悉く善い、舊いものは悉く惡いと云ふやうな、甚だ誤つた前提を置いて思想を拵いて居るかの如く思はれる。正確に論究すれば最初から批判する價値も無い位の事で、新しい

といふ事が必ずしも善いものではない、新しい中に善いものもあるし惡い者もある、舊いものは一概に悉く惡いとするのは、滑稽とも白痴とも申しやうの無いことである。我等は亜先の開拓したるこの東洋三千年はた六千年の文明を能く調べもせず、味ひもせずして、一概に之を捨てるといふは、殆ど馬鹿の隊長とでも言はねばならぬ事であらうと思ふ。然るに斯樣な傾向が洛々として人心を風靡する、これは所謂惡魔が國民に這入つて民心を惑亂するとでもいふべきであつて、思想の問題として論議する程の價値も無い事であります。

斯樣なものが勢力を得て來るに就ては、健全なる觀念の人達に於ては一段深き注意を拂つて、この國難とも稱すべき人心の動搖を防ぎ、それが邪道に走せない樣にその思想の歸結を導いて、正しき方に落つけて行かなければならぬと思ふのであります。さうするには先づ以て自己の思想信念を鞏固にして、確かに自分に打立てたる所の觀念がなければ、人を導くことも出來ない譯でありますから、唯今申した時の古今、國の東西といふ事に就て、左樣な輕率浮薄な態度に出でずして、先づ我國に於て尊いものは飽く迄も保存をし、さうして更に新しいものを加へて行かなければならない。時の古今に就て言へば、古を師とするといふ事は今も尙ほ捨つべきものではなからうと思ふ、社會問題に就ても古を師とするといふと、東洋の美風を輕々しく捨てるといふ事は出來ない、西洋が新を趁うて趨る結果は遂に今日の如き混亂の狀態に陷つたので、洵に憐れむべき事である、彼等は過去に於て健全なる文明を有せざりしが故に、今日は破綻を來して改造また改造といふやうな譯で、實は未だ目途も立たずして混亂の狀態に陷つて居るのであつて、西洋文明の全體に對して如何にも氣の毒な感じがするのである。之に反して我國に於ては幸に古に師とすべきものがあつた、それは一人一個の學說ではなくして、堂々たる教を成し經典を成して來た所のものがある、即ち佛教の如き儒教の如き又神道の如き、何れも一人一個の學者が考へついて、唯だ善いとか惡いとかいふのではなくして、堂々たる經典を成し、さうしてその偉大なる經典が互に調和的態度を保つて、相倚り相資げて今日に至つたのであります。現代人はその一つだも十分味ふ事をしないで、輕々しく古を罵るといふやうな事に相成つて居る。他の事は暫く措いて、佛教に關する智識、佛教に關する研究に於ては、殆ど今新しい事を言うて居る人の中に一人だも研究を積んだ人は無いのである、全部でなくともその部分に對してだも、法華經の一經に對してだも研究を積んで居る人であつたならば、左樣な輕率な態度には決して出でられない譯であります。

それ故にその一つの證左として、聖德太子が推古天皇の御代に、天皇の詔を奉じてお作りになつた憲法、天皇の名に依つて御發布になつた憲法――聖德太子がお作りになつたから世俗之を聖德太子の憲法といふけれども、實は朝廷より國民に發布せられた即ち日本國民の精神的憲法である。而してそれがどれだけの勢力を得て民心を支配したかと言へば、明治維新の時に至るまで凡そ千三百年の間、我國の精神支配の中堅となつて居つたものである。千三百年前の我國の文化は頗る素朴簡單なるものであつて、未だ文化が十分發達をして居つたのではない、文字も定まつて居ない、書物も無いと云ふやうな譯であるから、建國以來千三百年の長き歷史は思想の問題といふやうな事はなかつたのである。我國に於て精神文化が開け始めた時、即ち聖德太子が出られたのであるから、先づ思想文明の源と言つても宜いのである、その源に於て定められて爾來明治の始めに至る迄の千三百年間、是が我國文化の全體と稱しても宜い、明治以後に西洋の文明と接觸を取る時に、茲に一つの大きな失態があつたものである、その失態も樣々に言ひ現はす事が出來るけれども、簡單に言へば聖德太子の立てられたこの憲法の精神を蹂躪した事に依つて、日本の國家が茲に民心の動搖を招いたと言ひ得るのである。それであるから之を我國の思想史の上から見たならば小さな學派の分派――德川時代に來て儒者が獨立して佛教に反對をし、その儒者の中に或は朱子學、徂徠學、陽明學、折衷學、色々な名前を以て分派を論ずるが、左樣な事は小さなことである、儒教の內部に於ての少しの議論である。今日は德川時代に現はれた儒者を崇拜して居るけれども、その總ての儒者は佛教の觀念からは離れてしまひ、大部分は國體も知らない所の者である。この江戸に於て德川に仕へて居る儒者即ち聖堂の學者が先づその當時の日本の大學者といふべきものである、お茶の水にあつて今教育博物館となつて殘つて居る、そこに於て何を學びつゝあつたかと言へば、我が國體の

事などは少しも學ばないのみならず、國體の事に關しては書物もない。佛教の事は無論何もない、唯だ惡口をいふだけである、その惡口の言ひ方でも千遍一律同じ事を言つて居る、支那の韓退之の佛骨の表位を讀んで、それで少しばかり惡口を言つて居る、惡口の言ひ方でも頗る貧弱なものである。ただ佛教は厭世的であるとか、迷信的であるとかいふ、その事は何處から出て來て居るかといふと、彼等は大體宗教の觀念を全部否定して居つた、「神樣を信じたり、佛樣を信じたりする事は怪力亂神である、靈魂は死んでも消えないナンといふ事は分らぬ」、薄ツペラな唯物主義とも現實主義とも譯の分らぬ樣な所に頭を置いて、聖學の中に於ても大事な所を忘れて居つた人達である。それに對しては嚴密なる批判をしないで、唯だそれがえらい人のやうに盲目的に崇拜して來て居る。一方又この間に現れた神道者流、その中に殊に復古神道なるものが勢力を得たけれども、これ又貧弱固陋なるものであつて、佛教を罵り儒教を罵り、唯だ國の創始にあつた事が何でもかんでも良いと云ふ樣な事を言つて、實に思想の上から言つたならば亂暴なものである、彼等復古神道學者が書いて居るものを見たならば、聖人の教を罵ること、佛教を罵ること實に亂暴な有樣で、それが少しでも理由のある事をいふならばまだしも、儒教の方に於て血族結婚を否定して居る、そんな事は構ひはせんといふて、まるで今日の自然主義のやうな事を主張して居る、それから儒教に於て人には明德があると言ひ、佛教に於ては佛性があるといふ、そんな馬鹿な事はない、人民ナンといふ者は蟲螻みたやうなものである、佛教では殺生してならぬといふけれども、そんな事は愚な事ぢや、餘計殺生した者がえらくなつて居る、少しか殺さぬのが足輕ぢや、少し餘計殺したのが侍だ、もつと殺したのが大名だ、その一番餘計殺したのが國王ぢやといふ、亂暴とも何とも言ひやうが無い譯である。併ながらそれ等が大變えらい人になつて、本居宣長であるとか、加茂眞淵であるとか、平田篤胤であるとかいへば、實に健全なる思想家であるやうに考へて居つた、その時から調子がモウ外れてしまつて居る。尤も坊さんの方にもやはり出來損ひの者が勢力を得て、殊に佛教の中に於ては淨土宗や禪宗が德川時代には盛んであつたから、それ等の宗旨の根本の善し惡しは論じない事としても、

その當時の佛教――淨土宗及び眞宗は厭世悲觀的な狀態であつた事は爭ふべからざる事實である。殊に眞宗などがやる說教は惡人正機を力說して、善も惡もあつたものぢやない、ひたすら阿彌陀樣に縋りさへすれば宜いのである、自力があると邪魔になる、自力といふのは自分が德を積み善を積んだといふ事を自ら賴むのである、惡い者であれば自分の方は空ツぽだから、靑蓮に足を引張られて居る奴だから、そこでどうしても「阿彌陀樣賴みます」といふ事になつて來る、そこで業つくばりの婆アなどの方が却つて阿彌陀樣の方に賴む、その方が宜しいと言つて、盛んにその方面を力說したものであつて、そこに於て佛教は厭世的であり非道德的であり、人倫綱常を破壞するものであると非難されたので、佛教の本旨はさうでは無いけれども、その當時やつて居つた事は確かにその非難に當つて居るやうに思ふ。又禪宗にも色々の學者もあり議論もあらうけれども、結局禪宗の言ふのは超然主義であつて人生に現はれる事は是非ともに非なり、人間の事などは夢みたやうなものである、モツと高い所に眼を注がなければならぬ、本來これ無一物であると云ふ樣な事を力說したから、親とか子とかそんなケチな事をいふな、親も空である子も空である、本來無一物である、人間の道ナンテケチな事をいふナ、全體道などを透るから行き詰る、空中道無し道縱橫であるなどと放言する、丁度今日の極端な平等主義といふか、過激思想のやうな情調を帶びて居つたものである、確かにさうである、全部がさうでないにしても先づ大部分さうぢや。左樣な亂暴な事を言つて、國家が滅びたつて何があるといふやうな勢ひで、中には自分の子を叩き殺して、此奴は煩惱の塊ぢやと言つて、火を起して鐵弓にかけて田樂でも燒くやうに團扇でバタ〳〵煽いで、自分の子供を燒殺して、之で思ひ殘す事は無いと言つて坊さんになつた人もある、「俺は子供を燒殺して來た」「中々感心な奴ぢや」……塚の如くに調子が外れて居つた、佛教に對する誤解から來てその誤解が極端に趨つて居つた、さういふ事の方を多くやつたものだから、之に對して非常な非難も起つた譯である。

「この復古神道のやうな、我國の創始にあつた事は是が非でも善いと云ふやうな固陋な、古を一概に墨守しやうとする思想、又淨土宗や禪宗のやうな厭世的超越的なる思想を鼓吹す

る者や、又支那崇拜の薄馬鹿な儒者があつて、死んだ先の事など考へなくても宜いものぢや、神も佛もそんな事は皆怪力亂神だといつて、洵に淺薄な思想、この三つが互ひに分立して相鬪うて居つたのである、どつちに附いて行つた所が全部不健全である、どつちから見ても間違と間違の鉢合せぢやないか、厭世的超越的な思想に行つても詰らないだらうし、假令古を師とするからと云つても、唯だ昔の素朴なことのみに戻つて、今申す通り人間は皆蟲螻ぢや、除計殺した者がえらくなつて居ると云ふやうな事は、思想問題として一顧の價値もないではないか、無學文盲の親父が出鱈目を言つて居つたに過ぎぬ、それが一時學派をなして今日まで崇拜人物となつて居る、それに加へて維新の際に押寄せて、この復古神道學派と朱子學派が頭を擡げて來て、固陋なる者が勢力を得て、是等に佛教の方がやられて來たといふのは、儒者の結んで居る方が武士であつて、武士が維新の偉業をなしたのであり、その武士の書生ツポの頭腦は、朱子學か或は復古神道のやうな頭腦で出來て居た、それが勢力を得てズツと行つたから、明治初年の我國の思想といふものは、一方に保守的な事を云へば固陋貧弱な、やはり平田や本居のやうに國の初めにあつた事が何でも善いのだと云ふやうな思想、それから儒者の方で學んだ者は神も佛も怪力亂神だ、死んだ先きの事など考へるのは馬鹿者だといふ、この薄ツペラな頭腦、これが良い位地を占めて役人となり、軍人となり、教育家となりして、我國の智識階級といふものになつた。そこに又西洋の文明を入れて來るに就て、西洋にも善い所も多々あらうけれども、その善い方は後に延して、變な所から入れかけた、無闇に佛蘭西式の文明を入れたものである、いきなりそこに自由といふ事、法律萬能の思想を入れたから、日比谷に集つて烏が啼くやうな事をワイ〳〵言ふやうになつた、何の爲めにカア〳〵やつて居るか、問題がどれだけの價値があるか、これは佛蘭西の革命當時から來た政治に熱狂して、大事なそれ以上の根本の事を忘れた飛上り調子、浮上り調子の狀態を學んで居るのである。それから學問はやはり西洋の近代思想の唯物的の學問で、殖産興業の方に力を入れて、所謂實利主義、法律主義、政治熱狂といふやうな事を學んで來たものである。そこで選擧や何かに熱中して、何の爲めにやるのか分らぬけれども、選擧狂。みたやうな者が出來て「あの親父他の事には金を出さんけれども、選擧には五百圓位出す、妙な親父だ」と云ふ、そんな者が澤山出來て居る、何も主義の爲めでもなければ何でもない、唯だ選擧だと言へば飛出すと云ふ一種の狂人である、さういふ者が澤山出來て、妙に熱を持つてやつて居る。それから又一方には唯今申すやうな實利主義が盛んになつたから、經濟上に現はれて來る思想が非常な我慾の事になつて、所謂暴利を貪るやうな方に商業が走せて來て居るのである「長く得意にして居るからあそこの家には安くして、親切にせんならぬ」と云ふ考へが無くなつて、迂つかりして居つたならば米屋でも桝目を誤魔化す、あそこの家では小言を些とも言はぬといふ事になれば、量つて見れば必ず米が少ない、何も小言をいはぬのだから安くせんならぬといふ事は無くなつてしまつた。今急に警察官が米屋の桝を調べるといふ事になつたならば、東京中に直ぐに百軒や百五十軒雖の桝を使つて居つて檢擧されるに違ひない。酒でも一升德利を調べて見たならば、或は九合五勺、或は九合、甚しきは八合五勺しか這入らぬといふやうな德利が澤山あるかと思ふ、健實正直な經濟を進めて行かうといふ考へが無くなつて居るから、その大なるに至つては貿易の上に現れて、所謂不正なる物を賣つて日本の信用を害するやうになり、段々やつて行く中に勞働運動が始つて來た。素々生地が壞れて居るから、これが面倒な事になつて來た、日本の勞働問題といふものが、若も非常な美風の維持されて居る所に起つたのならば、左程困難し無いけれども、資本家の人格、勞働者の人格、これがモウ以前から壞れつゝあつたものであり、そこに勞働問題が起つたから中々始末の悪い事になる。分るべき事が双方に分らない、資本家の自覺といふ事も思ふやうに起らぬかも知れん、勞働者の正しき觀念も起りさうで起らんかも知れん、その中に悪い方が段々發達して來て、癒る病氣かと思うて居ると、遂に慢性となつて、癒りさうに思うたけれども迚も癒らない、これはモウ駄目だといふ事になるかも知れぬ。

それ故にいろ〳〵の間違ひがあるけれども、德川時代の左樣な偏つた學問と、それから明治以後に受入れた歐米の皮相の文明と、この二つが押寄せて日本の今日を縺ひしたものであつて、今現れて居る間違つた新しがりの思想は、これは無

論問題にならぬ事が多いけれども、併しそれが勢力を得るといふのは、この二つの大きな原因があつて事此に至つて居るものであると思ふ。故に根治的に今の民心を善導しやうとすれば、この二ツの誤りを正さんければならぬのである、西洋の文明を味ふにはモツと根本に遡入つて、西洋の善き方面を十分に吸收して、悪い方面を捨てゝ行くことに努力せんければならぬ、口ではさういふ事を言つても、眞面目に熱心を以て歐米文明の長短を批判し取捨する確信が無いやうに思はれる、少しく嚴密なる批評でもすれば、直ちにあれは「頑固である」といふやうな事を言つて、輕浮薄に異邦の文明に屈從する、これを新人と稱して迎へるが如き態度は國を誤る者と言はなければならぬ。

モウ一つは我國の過去の文明を論ずる場合に、先に述べた偏つた方の佛教と、偏つた儒者、偏つた國學者といふやうな、德川時代よりの間違ひが傳はつて來た、之を一つ看破しなければいかん。斯の如きものは眞の佛教でもなければ、眞の儒教でも神道でもなく、又我國の根本の文明の中軸にあつたものではない。即ちその根本より流れた我國の文明は何處にあつたかというと、それ等の長所を綜合して、その三つが相倚り相資けて來た點にある。即ち聖德太子の言はれる「鼎立」といふ事を十分味はなければなるまいと思ふのであります、鼎は三本足である、一本を斷れば必ず倒れる、四本足の机ならば一本斷つても倒れない、押へれば倒れるけれども、そつとして置けば三本で持つて居る、所が鼎の三本足は一本斷つたらどんなにそつとして置かうと思つても立つて居ない、必ず倒れてしまふ。維神の教と儒教と佛教との三教に就て、その一つを捨てれば、我國の文明は失敗に陷ると斷言されたのが鼎立といふ事である。所がその足を二本まで斷つてしまつて、殘りの一本もヒョロ〳〵ヘナ〳〵にして、全き維神の教を發揮したのでなくして、その一本がヘナ〳〵になつて居るから、どうしても立つ譯が無い。立つて居らぬ證據が今日現れて來たので、民心がフラリ〳〵して居る、そこに風が吹くのだから搖つたものではない。家が十本の柱で立つて居る家とするならば、その三分の二即ち七本まで拔いてしまつて、あと三本ばかりで僅かに持つて居る、そこに風が吹いて來たらグラ〳〵するのは當り前ぢやないか。所がその柱を直すのは大儀であるから、マア間に合せに紐で此方に引張つて置け、そつちへ紐で引張れといふやうな事をやつて居る、日本の現狀は確にこの引張り合ひで持たして居るので、本當に持つて居るのではない、最早や壞れて居る、壞れて居る證據は人々の精神に確乎たる信念無く、理想無く、思想の歸着點に就てはつきりしたものが無い。さうして今の所謂健全派なるものは、見物人傍觀人である、健全と稱する方のものは今引込んで欠伸をして居る、飛出して居る方は不健全な方で、ヤレ〳〵いと云つて居る、全く日本の現狀は、この儀で行けばどうしても不健全なものが勝利を得る譯であります。彼等には非常な熱心がある、愚な事にもせよ、間違つた事にもせよ、やる當人から言へば牢に入れられても構はぬ、殺されても構はぬ、やつて〳〵やり捲ると考へて居る。一方の方は「イヤ今日は暑いからいかん、汗が出るから御免だ」といふやうな事で尻込みをして居る、その他は見物人で欠伸をして居る、今日の狀勢は確かにさうである。多數の人はこの思想の問題に就ては、どういふものか本當の熱心が起らぬ、鐵砲の彈丸が飛んで來れば日本人には愛國心が燃えるけれども、武力の戰ひの起らぬ限りには、幾ら言うても思想の戰ひに眠醒めざる所の國民である。之は日蓮聖人が嘗て慨嘆された所以で、蒙古は恐るゝに足らぬが、國民の精神の腐敗は恐るべきである、人心柔るゝが故に國家が亂れるのであつて、國家の亂れた形のみを論じた所が仕方がない、先づ人心を正さん哉と立正安國論を書かれたが、當時の天下は之を受入れない、國民もその意味深き點を了解せずして今日に至つたのである。今尙ほ聖人の思想を十分了解したとは言へない、極く少數者が之を敬慕して居るので、大多數の政治家であるとか、教育者であるとか、相當な人物階級に於ては、今尙ほ日蓮のこの主張に傾聽だもせない人が多いのである。それで何か自分の觀念を西洋の思想の中から得て來ろ、政治家が觀念の基礎を何處に置いて居るかと云ふに、好い加減に組合せてやつて行かうといふやうな風である。

それは洵に慨嘆すべき事でありますが、幸に聖德太子の憲法は、その文章がその儘儼存して居るし、尙ほその憲法發布に關しての事柄がはつきり「憲法本紀」として記載されて居ること故に、これに依つて當年の意味を觀ひますれば、千三

百數十年を隔てたる今日にして、聖德太子がお定めになつた事が斯く迄も適當な意味を有つて居り、正確にして且つ適切なるには、實に驚かざるを得ないのである、我國が古を師とするといふは、今尙ほ意味ある事だと考へるのである、私は過去に善き文明を有つて居る事程愉快にして且つ幸福なることはないと思ふのであります。然るに現代人は過去の文明を罵つて未熟なる新文明に趨らんとして居る、或る意味に於てはその全體が不健全な傾向であります、この風潮全體が文明を破壞し、失敗に導く誤つた觀念であると言つて宜いのである。何故にモウ少し落ついて眞實に研究しないか、假令千年二千年前に言ひ現された事であつても、眞理は眞理である、昨日今日現れた事にしても非眞理は非眞理でないか。大なる眞理は古今に變りは無い、碁なら碁といふものゝ原則は少しも變りはしない、一局々々新しく打つて行くから、新しい碁が出來るけれども、併しその新しいといふのは少しの變化である、白と黑が相闘つて、斯ういふやり方をすれば負ける、部分に氣を取られて二目三目を心配して、大なる地を取られて行き居る事に誤のつかぬやうなヘボ碁は負けるといふ原則は少しも變らない、さういふ事が又碁を打つに就ては大事な點ナンである。新手だ〳〵といふやうな事を言つて、「斯ういふ面白い手を俺が考へた、一つやつて見やう、これは新手だぞ、俺が考へたんだぞ」……そんな事は何も値打はありはせん、大なる眞理は何時も同じ事である、相撲なら相撲の手でも、俺が考へたとか新手だとか言つて、何度新しい手を出して見た所が、ポンと投げ出されてしまふのである、新手の相撲が出て來てどれだけの價値があるか。精神文化も亦その通りで、長き歴史を經て進歩して來た文明が儼然として居るならば、夫より違つた新手が出て來ると言つてピヨコ〳〵飛出しても、何も大した事はない、それを西洋に於ては非常に新手にえらいとがあるやうに思ふだけ、それだけ過去の文明が老ひ耄て居る事を證明するのである。吾々は東洋文明に就て多少の研鑽を積んだものであるが、今日いろ〳〵現れる所の思想や學說に就て、一つも新しいものとして感服するものは見出し得ない。幸に諸君が斯ういふ事が非常に新しい意味で、日本文明に無かつた偉大なものだといふものを御承知であるなら、お示しを願ひたいと思ふ。何もありはせぬ、さうして近頃新しいと思うて居るやうな事は、少しも新しい譯ではない、それは以前に批判し洗練し取捨された廢物である。系統的に學問をしないから分らぬので、新しいと思つて誤解をして居るに過ぎぬ。

（未完）

世の中と佛教

（大正九年九月二十三日東京本所柳島に於るうど〳〵てらにて）

陸軍少將　野澤悌吾

世の中の事柄には大抵善惡の二方面があります。例へば此席にある水にしますても、水といふ物は私共が飲むといふ方から申すと非常に結構なものである、水を飲まなければ喉が渴いて堪へられない、人間の爲めには水を飲むといふ事は、飯を食ふ事と共に非常な必要な事である、さういふ方を考へると水といふ物は大切なものであり、非常に結構なものである。併ながらこれが大きな河と成つて荒れ、大きな海となつて湛へて居る際に、その水の中に人間の身體が溺れましたならば、水ほど惡い物はない、直ちに人間の生命が奪られてしまふ。火であつても同樣であります、吾々には火がなければ飯を炊く事も出來ず、又夜間仕事をすることも出來ない、さういふ結構なものであるけれども、若しこれが一度家について燃え上つた時には、數十萬數百萬の財産といふ物も、瞬く間に亡くなつてしまふ、さういふ方面を考へた時には火といふものは非常に惡いものだといふ事になる。物事は何事でも善い方面と惡い方面とがありますが、その善い方面を何處までも育て上げて、惡い方面を無くなして行くといふ事が、この世の中に一番大切な事になるのであります。

例へば人間であつても、人間といふ者は善い者であるか惡い者であるかと言ふと、善い方もあり惡い方もある、人間は非常に優しい方面を有つて居るかと思ふと、又人を騙すとか或は人を殺るといふやうな惡い方面もある、この人間の善い方面を見て育て〻行き、惡い方面を成るべく直して行くといふ事が最も大切な事になるのであります。お釋迦樣が始めて正覺を開いて佛になられた時に、世の中を見渡した所が、一切の衆生は皆迷の海に沈み果て〻居る、如何にも日々の利益

の爲に互ひに相爭うて、人を押倒し、人を蹴き、あらゆる惡い事をしても自分の財布を肥やさうといふ事にのみ奔走して居る、如何にも穢れ果てたる者共であるといふ事を考へられて、到底この人々を救ふ事は出來ないであらう、斯樣な穢れた者共を救ふ事は困難であるから、自分は折角佛と成つて正覺を開いたけれども、是れより再び涅槃に入らうといふ事をお考へになつたのであります。けれどもそこに又思ひ直されて、更に一切衆生の心を見ると、一切衆生には佛と同じ立派な性質を有つて居る、穢れ果てたるその中に非常に尊いところの性質を有つて居る、之を育てゝ行つたならば我と等しく成佛をさせる事が出來るといふ事を認められて、それから五十年の間非常な大活動をして教化を垂れられ、その教は今日五千卷七千卷の經典となつて遺つて居るのであります。

この人間の善い方面を始終見て行くといふ事と、惡い方面を先に見て行くといふ事は、非常な關係のある事柄でありまして、例へば之を家庭に就て申すならば、嫁は姑を見て、姑といふ者は嫁いびりをするものである、意地の惡いものであるといふ方面ばかりを考へ、又姑の方は、嫁といふ者は何でも我儘な事をして、密りと餅菓子などを買つて來て、自分に隱して食る者であるといふやうな方面ばかりを考へ、息子は親父といふ者は何でも自分が好い加減な歳になると、子供にばかり寄りかゝつて、子供を喰ひものにして行くものであるといふやうな方をのみ考へ、親父は又子供といふ者は極道な者で、親の心配を少しも考へないで、出來るだけ自分の小使を遣つて行く者であるといふ方面ばかり考へて居つたならば、家庭といふものは到底治まるものでは無い。斯ういふやうにお互ひの心の間に、向ふは惡い者であるといふ考へを持つたならば、そこに警戒をしあふ事になる、ちやんと心の戸を締めて、「俺を騙すのだな」「俺を馬鹿にするのだな」といふ考へを以てかゝるから警戒をする、警戒をした場合はどうしても今度は武裝をして來なければならぬ、兵隊さんのやうに鐵砲を持ち大砲を持つて、「イザ」と言つた時にはこの鐵砲で打つてやらうといふ武裝をするやうになる、心の中に警戒をし武裝をして、何時でも喧嘩の出來るだけの準備をして態つて行くといふ事になつたならば、その心の持方といふものは何時しか顏に現はれ、言葉に現はれ、擧動に現はれて、終には必ず火蓋をきつて大喧嘩をするといふ事が出來て來るのであります。これに反して嫁さんは、姑といふ者はその家の歷史である、その家の家風といふものを能く心得て、之れ迄家の爲めに働いて來た人である、自分は若くて經驗の無い身であるから姑の言ふ事を能く肯いて、その教に從つてこの家を治めて襲いで行かなければならぬと考へる、姑の方でもこれは家の生命を襲いで行く大切な嫁であるから、成るべく善い方に導いてやらなければならぬといふ親切の心を以てこれに對し、親は子を愛して行き、子は親を尊んで行くといふ事になつて參りますれば、家庭は決して風波といふものは起らないのである。假令惡い方面がありましても之を直して行けば、この人間は善くなるのであるといふ事を考へて行つたならば、そこに喧嘩も起きないのである。

この善い方を見て行くか惡い方を見て行くかといふ事は、非常に大きな問題であつて、之を佛教の方から考へて行くと惡い方面を見て行く教は小乘の教と言つて低い教であり、善い方を見て行く教は大乘の教と言つて尊い教になつて居る。日本の佛教は小乘の教といふものは一つも無い、今日いろいろの宗旨宗派が分れて居るけれども、悉く大乘佛教の精神を採つたものである、人間の善い方面を見て、之を佛道に導いて行かうといふ事を第一にして進んで行くのが佛教であります。佛教ばかりではない、東洋の教は總べてその點に於ては同じ事である、儒教と言つて支那の孔子といふ人の教、孟子といふ人の教であつても、人間といふ者は非常に性質の善いものであると立てゝ教を垂れて居る、殊に孟子といふ人などは、この人間の性質が善いものか惡いものかといふ事に就て、人間の性質は善いものであるといふ事を極力論じて居るのであります。これに反して支那でも荀子といふやうな人達は、人間の性質は惡いものである、本來煮ても燒いても喰へないものであるから、人間はその煮ても燒いても喰へないものを取扱ふやうな方法を以て行かなければならぬといふ事を論じて居る、併しこの人間の性質は善いか惡いかといふ問題は、支那に於て非常な議論が起つて、後遂に人間の性は善なるものであるといふ事に結論が附いて、今日の儒教といふものがズッと教を說かれて居るのであります。

若し家庭に於て「親父といふ者は不都合なものである」「子

供といふ者は横着なものである」とお互ひに考へ合つて行つた時には、どうしてもそこに權利義務といふ武裝をしてかゝらなければならぬ、權利といふものを主張して行き、義務といふものを要求して行く、お互ひに權利義務の關係に於てその家庭を治めて行くといふ事になつて、冷やかな家庭が成立つのであります。歐羅巴はこの權利義務の思想を以て總ての問題を取扱いて行かうとして居る、それ故に線を貫つた以上は、直ぐ姑との仲の折合ひを考へて、どうしても親達と一緒に居ることは出來ないといふので外に出てしまふ、結婚をした當日から二人手を引き合つて新婚旅行と言つて洒落出す譯である。今日日本でも段々眞似をして居りますが、之は舅姑といふ者は甚だ宜しくないものであるといふ方面を見た、權利義務の思想から起きて居る習慣に外ならぬのであります。日本に於てはさうではない、先程申すやうに姑は善い者である、親といふ者は親切なものであるといふ事を標準にして立てゝ居りますから、一家族悉く團樂して一つの家庭の中に居る事が出來る、それは人間の事であるからいろ〳〵の問題も起きて來るでせうけれども、それを權利義務の關係に依つて正すといふ事でなく、お互ひに話を仕合ひ、笑ひ合つて居る中に於て、その難かしい問題をスラ〳〵と解結をして行かうといふのが、日本の家庭制度である。即ち人間の善い方面を見てお互ひに交際つて行つて、家庭を治めて行かうといふのであります。言ひ換へて見れば西洋のこの主義は小乘の主義である、日本の家庭は大乘の主義である、西洋の習慣は低い習慣である、東洋の習慣は誠に尊い習慣である。

更にこの考へを國家といふものゝ上に就て考へて見ますと、國家を觀るのでも、日本の觀方と西洋の觀方とでは餘程違ひがある。西洋の觀方ではどう言つて居るかといふと、國といふものがあるから戰爭が起る、國といふものが無くなつたならば、お互ひに戰爭を仕合ふといふ事は無くなる、國があればこそ今の獨逸の樣な軍國主義の國が現はれて、他國の土地でも何でも侵略して行かうとし、亞米利加の如き大資本を擁して他の貧しい國の生血を吸ふて行かうとする者が出て來るのである、それ故に國は惡いものであるから之を打壞はしてしまつた方が宜からうといふ思想が段々湧いて來るのである。所が日本ではどう國を觀て居るかといふと、殊に日本の如きは國をお開きになつた方は天照大神といふ事實上の神である、その神樣が神の心を以て國を開かれ、神の子孫たる神武天皇がこの神の心を日本の國に樹てゝ、さうしてこの國を豪められて居るのである、神の私の無い公平な心、誠に惠み深い心を以てこの國を建てゝ行つて、國の力と光とに依つて立派な文明を作つて行かう、その文明の力に依つて、吾々國民に物質の上に於ても精神の方面に於ても幸福を與へて行かう、單に日本の國民ばかりではない、更にこの文明を世界の全般に推及ぼして、世界の全人類をして幸福に浴せしめやうといふ事を考へて行つたのがこの日本の國家であります、この善い方面を昔から觀て居るのが日本人の國家觀、國家の觀方である。國家の觀方といふものが惡い方面ばかりを觀て居るのでなく、善い方面を觀て居る、さうして惡い方面が出て來た時にはそれを押除けて、今申したやうな立派な國家の目的に向つて進まうとして居るのである。成る程國家といふものを惡い方面に陷れて觀たならば、軍國主義の國家にもなり、侵略主義の國家にもなり、或は亞米利加の如き產業帝國主義とでも言ひますか、大なる資本を以て世界のあらゆる方面に資本を運轉して、他國の金を吸ひ取るといふやうな惡い國も出來ませう、併し國といふものはさう云ふ惡い方面のあるものであるから、之を打壞してしまへといふ事になつたならば、そこから起る弊害といふものは又非常に大きなものである。露西亞の國の如きはさういふ考から一遍國を打壞してしまつたのでありますが、國を打壞したならばどうなるかといふと、その國の產業でも總てのものが發達をしない、國の力に依つてこそ工業も發達して行くのである、保護されて行くのである、國が壞れてしまつたならば、工業といふものは保護される事は出來ないから、十分育つ事は出來ない、工業が發達しないといふ事になると皆が怠けて居つて物を拵へないから、吾々の日常の生活に必要な品物が非常に高くなつて來る。斯ういふ風に國の惡い方面ばかりを見てこれを打壞した時には、更にそれよりも甚しい災禍を受けるといふ事をお互ひに考へなければならぬ。この分岐點がやはり東洋と西洋の國の觀方の上に於ても、一方は小乘的であり、一方は大乘的である、一方は善い方面を見て行き、一方は惡い方面を見て行くといふ大なる差がある、そこからして今日の思

想のうれといふものも出て來るのであります。

更に人間の社會といふものを觀ましても、人間といふ者は今日活きて行くにはお互ひに競爭を仕合つて行くべきものである、お互ひが競爭をして人を突飛ばしても自分が好くなつて行かうといふのが人間の性質であるといつて、その方面ばかりを觀てそこに闘ひを起して行くならば、金を持つた者は益々その金が殖えて來る。實際また今日の經濟狀態で申すならば、何れも皆物質のみを爭うて行くのであるから、金の出來た者は「これは俺の力でこの金が出來たんだ」といふ考へから、それを貧窮なる者に見せびらかす、商賣をして儲かつた、さうすると一方に別莊を造る、立派な衣服を着て歩く、自動車に乘つて藝者を伴れて歩くといふやうな事をして見せびらかす、金の出來ない者が之を見て決して好い心持はしない、片方は「これは競爭に依つて勝つたのだ、自分の力でこの富を得たのだ」と考へるから、その富を見せびらかすと云ふのであるけれども、競爭に負けた方の者が之を考へたならば、非常に憎らしい事であると考へるのが當然の事であります。社會といふものはお互ひに競爭をして、慾の突張り合ひ、利益の取り合ひをして居るものであるといふ方面を主として觀て考へて行つたのが西洋の思想でありますが、そこから今日の問題が非常に喧ましく起きて來るのであります。今日のやうに競爭に委かして行くと金持は益々金持になつて、貧乏人は益ゝ貧乏になつて來る、さういふ事であると貧乏人といふ者は何代經つても金持になる事は出來ない狀況になつて來る、それ故にこの金を持つて居る奴の財産を奪つてしまつて、之を皆に平等に分けて行くといふ制度を採らなければいかんといふのが今日の社會主義者の言ふて居る所である。さうしてその社會主義を實行して行く上に於てどういふ態度を採つて行くかといふと、「今まで吾々を苦めて來た金持共、それは實は金持の金ではない、吾々の取るべき金を彼等が法律の保護に依つて奪つたのであるから、之を取返してやらなければならぬ、今まで吾々に對して横暴を働いて來たから、吾々はこれに對して復讐をするのである」といふ喧嘩腰の態度を以て行くといふ事になると、その落行く結果は遂に今日の露西亞のやうな狀況に陷つてしまふのである。露西亞はさういふ樣な事からこの社會を打壞してしまつて、今尙混沌たる有樣で、總ての人々が不幸を見て居るのであります。私は豫言を致して置きますが、露西亞は決して今日の儘で治まるものではない、今日の思想の儘で進んで參つたならば、モウ一遍大なる虐殺が起つて來るといふ事を私は明言して置きます。

佛教信仰の正統

本多日生

第九　三寶に依るの信仰（其二）

然らば慈悲の教としてはどうかと申せば、これ亦如何にも鮮やかに現はれて居るので、釋迦は最初正覺を開いた時に考へた、自分は非常にその正覺が愉快であつたから、この喜悅を一人私することは忍びない、どうかして之を人々に分ち與へたいと云ふ事を考へられた。それが正覺を開かれた時に起つた一番最初の考へであると書いてある。これは少しく人格のある者であつたならば、必ずさうあるであらうと思ふので、例へば景色の佳い所に行つて、「あゝ佳い景色だな」と思へば、お母さんを伴れて來たら宜かつたと思ふ。或は何處かに行つて、非常に旨い牡丹餅でも食へば、「斯んな旨い牡丹餅ならば娘を伴れて來れば宜かつた」と思ふ。喜が現はれた時には、必ず自分の愛する者と共にこの喜悅を分ちたいと云ふ感情が起るものである。釋迦が菩提を成就して、彼の法悅に滿ちて七日七夜の間眠る事も忘れ、食も忘れて非常な偉大な喜悅に覆はれて居る時に、自分の精神にパッと動いたものは「この偉大なる喜悅を、彼の憫める者、苦める者に分ち與へたい」といふ考へであつた。それは確かにさう云ふものであらうと思ふ、其處で「然らば如何にしてこの喜悅を分つ可きか」と考へられた時に、人々には色々な迷ひがあり罪があり、拙けた根性があつて、容易にこの喜悅に達する事は出來まい、困つた者ぢやと思うて居られた。併し更に深く考へられた所が人々の心の奥に非常に良い物を持つて居る、表面は根性が拙れて居り、或は罪に穢れて居つても、心の奥を磨き上げると いふと、非常な尊い光がある、非常な尊い濟度の可能性といい

ふものを持つて居るといふ事を、一番始めにお考へになつて居る、即ち『原本度易』といふ一言が佛教の根本の思想であります。人々は表面は穢れて居つても、その根本に突き込めば其處に非常に尊いものがあつて、之を向上せしむることが出來るといふ事を釋迦如來は觀破した。この言葉を他の字で現はして『心性本淨』とも言つて居る、心の本性はもと淨きものである、之を譬へによせて、蓮の如きものである、蓮は泥の中にあるけれども、芽を吹き花の咲く時分には、非常に美しい綺麗な花が咲くのである。人の心も表面は泥のやうであるけれども、その中に蓮の花を開く可きものがあるといふ事を看破して、技に濟度の可能といふことを信じて、それから當時印度の一番文明が進み、思想が發達して居ると言はれた婆羅痆斯國の鹿野園に行つて、始めて法を說いたのであります。その說く時今申すやうな親切を以て臨んだのである、故に小乘の教は慈悲が缺けて居るとか、自分さへ助かれば宜いのぢやといふやうな事を云ふが、これは確かに惡口である、何も知らんでそんな事を云ふのである。阿含の經典を拔けて見たならば、一としてこの慈悲の高潮されて居ない所は無い、阿含の一番初めの『增一阿含經』の劈頭に、この經を結集する時分に、迦葉阿難等の間に話された言葉が書いてあるが、釋迦如來を慕ふ所の人達は、釋尊の智慧と釋尊の慈悲とに對して、非常な熱心な渴仰を捧げて居る。又釋迦如來が弟子達に對せられる所の教訓に就ても、一々慈悲といふ事を說かないことはない。又阿含部の中に『阿鬼經』といふお經がある、これは阿鬼といふ婆羅門が來て、釋尊と教への問答を試みるお經で、後に阿鬼が釋尊の教に感心して佛弟子になつたのでありますが、この阿鬼經などにも、釋迦は慈悲の事を最も强く說いて居る。例へば我が弟子に二通りある、一つは自分の罪の事を憂へて、早くこの五月蠅い世の中を逃れやうとする者もあるけれども、それは卑怯な奴である、我が弟子の勇氣のある者は、人を救ふが爲めに世に踏み止まる『人を憂ひ天下を度說す』と書いてある。これが我が弟子の本領である、人を憂ひて天下を度說すると云ふ事は、この位親切な言葉は無い。唯だ羅漢などと云ふ者は、口を開けてポカンとして、自分の行く先をどうしやうかと考へて居る者だと云ふのは、昔の畫工が何も知らんであんな樣な畫を無暗に描いたのを、世人が眞似してたゞ描くのである。佛教の羅漢といふ者は、熱烈な慈悲と勇氣とを以て奮闘したる濟世の像人である。然ればこそ佛教が三千年の歲月を經て、今日まで斯の如くに傳はつたのである。これが皆な口を開けてポカンとして居るやうな人間ばかりであつたならば、どうして佛教が日本に迄弘まりますか、今日のやうに交通は開けて居らぬ時に、山を越へ海を渡つてこの澤山のお經が支那に渡り、一切經七千卷の經卷となつたのは、非常な熱心な佛教徒の活動の結果である。であるから『阿含正行經』といふ小さな阿含部のお經がありますが、この中にも釋迦が申して居る、佛弟子といふ者は親切な者であるから、人よを憫れむのみではない、『蜚飛蠕動の類を慈哀して、皆な富貴安穩ならしめ、度說して泥洹の道を得せしむ』と說いてある。蜚飛蠕動といふのは何であるかと云へば、薄い羽根が生へて飛んで居るといふのであるから、蜂とか蜻蛉とか云ふやうな小さな蟲と云ふことである。蠕動といふのはムク〳〵動くと云ふのであるから手蟲とか蚯蚓みたやうなものを言ふのである。さういふ小さい蟲螻の末に至る迄も可愛がるといふ事が佛教の本領である、その通りに佛弟子はして居る。今日の坊さんは世間では臨分生臭坊主だとか、腰拔坊主だとか云ふけれども、坊さんの頭の中には、やはり釋迦が教へた教訓の或るものが傳はつて、蜚飛蠕動の類をも憫むといふ風は佛教の中にある。佛教を信心して居るお婆さんは決して今日の或る人達のやうに殘忍な事はしない。先年私は大森の停車場で待合はして居る時に驚いた事がある、何處かの身分高き奥樣であらうが、男の子を一人伴れて居つた、夏の暑い時であつたが、其處に甲蟲が飛んで來た、その子供が之を捕へて玩弄にしやうとするけれども、甲蟲は力が强くて動くものであるから、怖がつて子供がポンと叨土の上にぶつけた、けれども中々死なゝい。又動き出すので捕へて持つて來ると、怖いものであるから又ぶつける。さうすると今度奥さんが捕へて來たけれども、やはり動くので、又同じ樣に叨土にぶつけて、溝に殘酷なことをしてとう〳〵殺してしまつた。これは何でもない事のやうであるけれども、或る心理學者なども研究して居る事で、子供の時分に小さな蟲を殘酷に扱はせると、その性情が伸びて、遂に大きくなつて親を殺したり殺人罪を犯すやうな者が出來るのであると云

ふことを犯罪學者も言つて居る位で、洵に善くない事である。蟲螻をも可愛がると云ふ事から、人間の優しき性情を養うて行かなければならぬ、佛教はさう云ふ事を教へて居る。

であるから釋迦の教が親切なものだといふ事は、中々微底的なものである。或る時は釋迦が子供を褒うて氣違ひになつて走つて來る所の矯尸迦といふ素ツ裸の女を抱いて助けて居ることがある。阿難が見つともないと言つて反對した、「大勢の人が見て居る所で、素ツ裸で駈けて來る女を抱くナンといふのは、見つともないからお廢しなさい」と言つて、阿難が袖を引張つたけれども、釋迦は「大勢の人が何と言はうとも、この氣を失つて心狂亂して居る婦人は憫むべき者であるから、之を癒してやらなければならぬ」と言つた。所が其處には神通の力で、奇蹟のやうに說いてあるが、その女の眼には釋迦如來が自分の失つた可愛い子供に見えたとある、自分の可愛い子供が死んだので、「子供を返して呉れ、子供を返して呉れ」と言つて氣違ひになつて飛廻つて居る、それが釋迦如來の前に來たら、釋迦如來が自分の子供のやうに見えたので「あゝ可愛い子供が此處に來て居つたか」と言つて抱きついた。それから釋尊の慈悲の精神、德の力に依つてその氣違ひになつて居つた女が正氣にかへつて見ると、自分は素ツ裸でお釋迦樣に抱きついて居る、「ああこれは勿體ない事をした」と云ふので、裸の儘で退いて禮拜をした。その時釋迦が阿難の着て居る衣を脫げと言つて、その衣を婦人に着せて家に歸らしたといふ事がある。又夜半釋迦が樹の下などに座禪して居る時に、車輦などが來て、暗がりの所で釋迦如來を驚かすことがある。「おい〳〵何か居るぞ」と言つて見ると、釋尊が端然として樹下に座禪して居られる。「あゝこれが釋迦といふ名高い人ださうだ」と云ふので、車輦が大勢やつて來て、「まあ此處で一休みして行かう、何か一つ話をして貰ひたい」と云つた時に、釋迦が夜陰左樣な樹の下で、無智蒙昧なる車輦を集めて、熱心に法を說いたと云ふ事もある。故に釋迦の教を聽いて、一回の說教に於て感奮興起しない者は無い、一度釋迦の說法を聽いたけれども分らなかつたから、こんなやつは詰らんと言つて嘲つて去つた者はない、必らずや大歡喜の心を起して禮拜して居る。これは皆な釋尊の慈悲の力である、それは非常に偉大なものであつたので、實に釋尊の親切の德といふものは、今日吾々の想像にも及ばぬものである」。釋尊のお顏を拜しただけでも、人々はもう平和の心に歸つたのであらうと思ふ。

さういふやうな意味が段々に發達して、遂に法華經の壽量品となつて、如來は「每に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして」と云ふやうに、どうぞして一切衆生を救うてやらうと云ふ考へは、暫くも休むことはない、間斷なく一切衆生の事を思うて居るといふ風にお說きになつて居る。又涅槃經の終りの所に、大迦葉尊者が佛を讚歎した言葉に、自分は佛を讚歎する事は迚も出來ない、佛のみ能く佛を讚歎する力を有するけれども、自分等は迚も及ばん、併し一つの事を以てお褒め申上げるならば、慈悲の心に充ち滿ちてこの人の世に出で、我等に近づいてお救ひ下すつた事をお禮を申上げると言つて居る。如何にも釋尊の人格としては、絕對の慈悲を以て我等の地上に降つて、色々な困難と鬪ひつゝこの教をお立て下さつた事が最も有難いと言うて居る。

又佛教が色々の事を譬喩に寄せ因緣に寄せて說かれたといふ事は、法華經を見ても七箇の大きな譬が出て居るし、大體お經の題號から『妙法蓮華經』と言つて、偉大なる宇宙の大眞理、或は人身觀、宇宙觀すべてを蓮華の譬喩に依つて領解すべき樣に出來て居る。又譬喩品に行けば三車大車の譬あり、藥草喩品に行けば三草二木の譬あり、壽量品には醫者が病める子を癒すといふ事に譬られて、如何なる者も能く領解するやうに說かれて居る。それは一切經どのお經にも譬喩の應用の巧妙なる事言ふばかりないものである、この點を能く考へなければならぬ。譬喩といふものは具體的に感興があつて、實行力を生じて來るものである。唯だ理智の判斷で分つたと云ふだけでは、「はゝア、さうか」と言つて冷やかになつてしまふ。それが譬に移ると非常な感興が湧いて來て、それを實行に現はして行くといふ力になるものである。今その譬喩の一つの例證を擧げて見るならば、これは阿含の『增一阿含經』の中に、波斯匿王が夢を見た事に就ての說法がある。波斯匿王といふのは後に佛教を信ぜられた王樣であるけれども、最初婆羅門の教徒であつた。或る曉夢を續けて十見られた。所がその夢が何れも意味のありさうな夢で、どう考へて見てもこれは容易ならん事で、自分に何か災難が起つて來るやうに

感ぜられた。其處でそれを夫人に話された所が夫人が「左樣な事ならば自分が身代りに成りますから御安心なさるが宜い、併しその夢の意味はどう云ふ事か、幸ひ佛が祇園精舍に來られて說法されつゝあるから、其處にお參りしてその夢の事をお尋ねになつたら宜からう」と云ふので、波斯匿王がこの十の面白い夢を携へて佛所に參詣してお尋ね申した。それを釋尊が一々解說して居られる。第一の夢は三箇の釜が並んで居つて、眞中の釜には何も這入つて居らぬのに、左の釜の中にある色々な結構な物が、一つ眞中を通り越して右の釜の中に這入る、又右の釜の中にある色々な結構な物が、眞中を通り越して左の釜の中に這入る。幾度かさうするけれども一つの眞中の釜の中には這入らぬといふ夢を見た。これはどう云ふ意味であるかと尋ねた所が釋迦如來は、これは總て世が末になつて人生社會が惡化して行く有樣に就ての夢で、汝の身にかゝる事ではない。後代斯の如く世が惡化するに依つて、如來の敎を尊重して人心の敎化を忘らぬ樣にしなければならぬ、それには國王も力を盡さなければならぬといふ意味に於て、あなたが夢を見たのである。この三つの釜の事柄は、世の中の金持と金持とが相交つて、互に助け合ふ樣な事をやる。例へば「斯ういふ株を買つたが、大分儲かりさうだ、あんた一つどうぢや」「さうか、それぢやその株を百株こつちに貰はうか」「こんな地所があるが、あんた一つ買はんか」と云ふ樣な事を言つて、儲かりさうな事は總て有り餘る者が互に左の釜から右の釜に行き、右の釜から左の釜に行く。人を招待するのでも「今夜御馳走が出來たから」と言つて金持が金持を招んで、美味い物を食ひ飽きたやうな者を招んで御馳走するが、腹ペコ〳〵の中の釜には些つとも御馳走が這入らない、さういふやうな譯で、親類同士であつても貧しくなれば寄せつけない、他人でも富める者同士は盛んに相往來して助け合ふやうになると云ふ、人情の酷薄なる狀態を寫したものであると言はれた。

第二の夢は、馬が口の方で豆を食つて居つて、尻の方で藁を食つて居る、兩方が口になつて二タ所から食つて居る、妙な馬ぢやナーといふ夢を見た。これはどういふ事でありませうかと言つた所が、それは役人が腐敗をする夢である。即ち役人が上には役人としての俸給を貪り、下には賄賂を諸求して人民の方からも取る、又上の官金をも誤魔化すといふ風に、上の方でも誤魔化し、下の方からも取るから、口で豆を食ひ尻で藁を食ふと同じ事になる、これが爲めに人民寧きを得ず人民の幸福といふものが阻害されるのであるから、斯の如く腐敗せる官僚の弊を戒めたものであると說かれた。

第三の夢は、大きな樹で大分弱つて居るやうな樹に花が咲いた、「あんな樹はもう花が咲くまいと思うて居つたのに花が咲いた、どう云ふ譯だらう」と云ふやうな夢であつた。これは芭蕉の木でも花が咲くとそれ限り枯れてしまふといふ事があるが、さう云ふやうな夢を見た。其處で釋迦如來が仰せられるには、これは後代勞働者が非常に壓迫されて、身體も疲れ心も疲れて生活の不安に陷る、未だ年が餘り行かん中に身體が衰弱して、髮の毛は二十や二十五で白髮が生へるやうになり、若死をして行く、勞働者が勞役の爲めに疲れて、早く死するといふ夢である。故に社會の健全なる發達の爲めには、勞役者を安んずるやうにしなければならぬと言はれた。

第四の夢は、小さな木で、未だ一年か半年位の梅の木に實が成つた、妙な事であるといふ夢を見た。それはどういふ事かと云ふと、女が未だ年が行かない、この間まで未だお乳を呑んで居つたと思ふのに、もうお嫁に行つて子供を抱いてやつて來るといふやうに、後世早婚の弊害といふものが起つて來る、これが爲めにやはり人生の風儀が紊れていけなくなるといふ事であると言はれた。

第五の夢は、主人が一生懸命に繩を搗つて居ると、後ろの方にそつと羊がやつて來て、繩の出來たゞけ後ろから食つてしまつた。主人がもう大分深山繩が出來たと思うて、振りかへつて見ると何も無いといふ夢を見た。これはどう云ふ事であるかと云ふと、佛が仰しやるには、後世になると亭主が一生懸命餘所に行つて働いて錢を儲けて來ても、家に不貞の女房が居つて、儲けて來る錢を皆な浪費してしまつて、節期になつて勘定が足らぬといふやうな事になる。妻が浪費をして節約しないやうになつて、亭主の留守に出歩いて遊んだり、無駄な飲み食ひをしたりして、段々亭主がビイ〳〵になつて弱つてしまふと云ふ事である。成る程西洋の話などを聞いて見ると、女房が惡い爲めに家庭が持てぬといふ事である。女房を持てば夫がそれが爲めに酷い目に遭ふと云ふので、亞米

利加などでは女房を持たぬといふ組合を拵へて、中々盛んだといふ事であるが、その弊害は釋尊が既に阿含經の中に說かれて居ることである。

第六の夢は、狐が金の床の上に坐つて大威張りで居る、其處に人がその狐に御馳走を差上げて居るといふ夢である。それはどう云ふ事かと云ふと、後世卑しい人格の無い者でも、唯だ金錢の力を以て威張つて、さうして上の方に坐り込んで贅澤をして居る、詰り金力萬能の世となつて、それが金の床の上に居るから、丁度狐が金の床の上に坐つて居るやうなものである。さうして眞に身分の高い者或は人格の高い者は下に降りて働かんければならぬやうになつて、家で言へば主人が飯を炊いて、奉公人などがお座敷に構へ込んで御馳走を食つて、今日の御馳走は不味い」と云ふやうな事を言ふ。下に居て働くべき者が上にあがつて威張り倒すやうになる事であると說かれた。

第七は、大きな牛が自分の產んだやうな犢の乳を吸つて居るといふ夢を見た。これはどう云ふ事かと云ふと、世の中が段々惡くなると、母親が自分の產んだ娘を使つて、男をこしらへさせるなり、或は淫賣婦に賣るなりして、それに依つて親が生活をして行くやうになるから、それを現はして見ると、自分の產んだ娘の乳を吸うて親が生きて居ると云ふ事になる。早くから自分の產んだ子供を使つて、左樣な事に依つて金錢を貪るやうなことになると云ふ事である。

第八には、黑い牛が澤山寄つてパッと駈けて來る、それが四方から吼へながらやつて來て、將に爭はんとするやうであるけれども、側に來ると一向爭ひもしない。パッと駈けて來る勢ひは喧嘩でもしさうであるけれども、側にやつて來ると氣が拔けたやうな顏をして居るといふ夢である。これはどう云ふ事かと云ふと、後世は役人等も人民も、何れも國の癡といふものを重んじない、國の法令を輕んずるやうになり、さうして互ひに劣等な慾望を貪り、嫉妬排擠の心のみ盛んになつて、忠孝の德は行はれない――經文に明かに『忠孝行はれず』と書いてある。佞諂國を破り、左樣にして世の中が惡くなつて來る、さう云ふ風に人々が互ひに勝手な事をやつて、世の中が亂れて來るものであるといふ事を言はれた。それが牛に譬へられて居るのは、人間が動物化して互ひに勝手な事をやると云ふ意味だといふ事を言はれた。

第九には大きな龍のやうなものが流れて居る、その眞中の方は非常に濁つて居る、併ながら端の方の水は澄んで居ると云ふ夢である。これは如何なる事かと言へば、家來は君に忠節をしない、子は親に孝養なく、下は上を重んぜず、宗教を信ぜず、道德を重んぜず、非常に世の中が惡くなつて來る。それは先づ都會よりして始まるので、田舍の隅々に行くと未だ濁らない、素朴な人情の所にはやはり歷史的に發達したる美風が存するけれども、先づ人情の腐るのは東京とか大阪とか云ふやうな所から初るから、眞中が濁つて來るといふ意味であると說かれた。

第十には水が川のやうに流れて居る、これが眞赤な血を流したやうな水であると云ふ夢を見た。佛が之れを說明して言はれるには、これは世の中に鬪ひが盛んになつて、國と國とは大競爭をやり、階級の間にも鬪ひが起る、『將に相攻伐し殺害して流血正しく赤かるべし』で、內には勞働問題のやうな事に依つて血を流し、外には國と國との呑噬に依つて血を見るやうになつて、總てが血潮を流したる世界になるといふ事であると言はれた。これに就ても教化を重んじて我が正しき教を後代に傳へなければならぬといふ警告を與へられた。

これは唯だ一人の王の見た十の夢であるけれども、佛は新樣な事を一々譬喩因緣を以て能く說かれて居る。これも何でも無いやうであるが、世の中が鬪ひが盛になるといふよりも、「波斯匿王が夢を見た」、大きな瀧が眞赤になつて流れて居る、成る程これは國內にも血を見、國外にも血を見、世の中が血潮を流したやうになるものだな」と云ふと、低級なる人間でも能く記憶に存するし、又面白味を感じて、世の中の腐敗して行く事を其處に痛切に感ずるやうになるので、非常に感動力といふものがある。斯樣にして佛の教は如何なる低級なる者にも行渡つたのであります。

第三には三寶の中の僧寶に歸依すると云ふことである、この僧といふことは「僧伽」といふ梵語の略で、「和合」といふ事である。又「無鬪を僧となづく」とも言つて、鬪ひ無しと云ふ。無論佛教は惡と鬪ひ、邪と鬪ふといふ事はあるけれども、根本の精神を和合に置いてあるので、道に合し法に合し、又時に合し機根に合して適應を謬らぬやうにして行くといふ

事が佛弟子の本領である。であるから「僧とは和合の義」と翻譯されて居る位である。これも非常に大事なことで、今の西洋の思想では、鬪ひといふことを極端に論じて居る、詰り危險思想などとは、世の中を破壞する事が文明だと云ふ、勞働運動でもやはり資本と勞働は鬪ひを以て行かなければならぬ、勞働團體は戰鬪團體である、それが社會の進歩であるなどと云ふが、これは間違つた事である。今日は國と國との間にさへ國際聯盟を結んで、戰爭をしないやうにしやうと云ふ時に、國内に於て資本と勞働が鬪ひをするとか、或は政黨でも惡惡なる惡辣なる鬪ひをすると云ふ事は、謬つたる文明である。どうしても人は互に和合ひで助け合つて行くと云ふ事を原則にして文明を造らなければならぬと思ふ。

その僧侶は、上は佛の精神を奉じて佛の教を傳へるのが役目である。これも專門に佛教の事を習ふ者がなければ、やはり世の中に教化を垂れる事は出來ない。然るに今日は宗教のデモクラシーなどと言つて、「そんな坊さんや牧師などは要らん、神様と自分とさへあれば宜い、教などは聽かなくとも、自分が有難いやうに勝手に考へて居れば、それが一番善いのだ」と云ふやうな事を言つて居る。成る程最初はそれでも宜いやうに思はれる、吾々の能く知つて居る信者でも、「私は一通りの事を知つて居るし、こんなに電車が込むのに、演說などを聽きに行かんでも宜しい」といふ人がある。一應御尤であるが、併し夫が半年一年若くは二三年續つて會つて見ると、薩張り譯の分らぬ事を言つて、滅茶々々に成つてしまつて居る人が能くある。どうしても教といふものは師を俟つて正して行かなければならぬものだと思ふ。それに就て私が感じて居るのは、床屋に行くと、床屋が剃刀を研ぐ時分に、必ず一遍々々固い四角な小さな黑い色の石で砥石をなでる、さうして砥石に凸凹のないやうにして置いて剃刀を當てる。これは諸君が少し注意して御覽になつたら直ぐ分かる、所が素人は砥石の凸凹を直さないで剃刀を研ぐものであるから、どうも素人の研いだ剃刀は斬れないといふ事になる。丁度さう云ふものであつて、如何に一錢の人が賢しいやうでも、教を專門に學び、專門の宣傳をする者を侮蔑すると云ふと、その宗教といふものは素人の所にある砥石と同じで、凸凹になつてしまふ、何事でもさう云ふものだらうと思ふ。昔から俗に「餅は餅屋」と言つたのは、實に面白い言である。素人が幾ら戰爭の事に精しいと言つても、やはり軍人としての學問、修養、熟練を積まんければ駄目だらうと思ふ。相撲取は相撲取で、「自分は身體が大きいし、力が強いから」と言つて、國技館にいきなり飛出して見ても、土俵の上にあがつて見れば、幾ら素人が力が強いやうでも、裸撞ぎのペイ〳〵に直ぐ放り投げられて、腰が立たぬやうな目に遭ふと云ふやうなものである。であるから偉大なる宗教、教化といふものに就ては、やはりその天才を得て、それが專門に從事することを尊重するのが當然であると思ふ。政治でもやはりさうである、民衆政治などと云ふけれども、それは一つの政治の形式で、本當に偉大なる政治を行ふ者は民衆ではない、やはり政治家の天才である。今日の政黨にしても政友會でも憲政會でも、幹事とか委員とか云ふやうな組織ばかり幾ら善く出來て居つても、その中に偉大なる人物が無かつたならば、立派な政治といふものは行はれるものではない。幾ら組立てがよくて公平に選擧をして、十五人の委員を二十人にしても、それは内部の不平を治める方法としては宜いが、その中から偉大なる經綸といふものが決して起るものではない。であるから今日の民衆政治といふやうな事に、絶對の眞理があると思うてはいかん、無論民衆にも相當の權利を認めて、それ滿足を與へると云ふことは、世を治めて行く方法として、人間といふものは、兎角不平を言ひたがる動物であるから、不平を言はぬやうに、自分のした事ならば失敗でも默つて居る、自分が炊いた御飯なれば、少しく柔らかくとも「いや、軟らかいのは消化がよい」と云ふやうな事を言つて濟むものである。總てさういふ得手勝手な動物であるが故に、それに文句を言はさぬ方法としては宜からうけれども、政治の實質としては唯だ民衆の御機嫌ばかり取つたならば、低級なる經綸よりほか興らんものである。宗教もやはりその通りで、宗教に坊さんは要らぬとか言つて、信者同士で滿足する、今日でも禪田の八講などと云ふものがあつて、坊さん無しで濟まして居るが、其處には何の教義も無く、信仰も無く、低級なものになつて、唯だワイ〳〵やつて居るだけのものである。これもやはり釋迦如來が言はれた通り、教を重んずるには併せて僧を重んじなければならぬ。

日蓮聖人などもその點に於ては能く說かれて居るので、例へば、

薪無ければ火無し、佛法ありと雖も僧資あつて習ひ傳へずんば、正法像法を過ぎて末法には傳はるべからず。

と仰せられましたが、西洋に於ても宗教家を抹殺し、宗教の教會を燒打ちしたといふやうな事は非常な間違ひである。露西亞に於てもこの間の政變には、寺をみな打壞して坊さんを虐めて居る。それをやつた宗教大臣といふものは、何處かに流浪して居つた二十二歳の女である、平生から亂暴な事をする奴で、彼奴は激しい女であるから宗教大臣にしたら宜からうと云ふので、宗教大臣にした所が、この女が「寺を打壞せ、坊主の頭を撲倒せ」といふやうな事を命令したものであるから、それに民衆が皆な贊成をしてワイ〳〵行つた。民衆といふものは決して賢明なものではない、民衆を賢明だなどと言つて煽動る者は野心家である、政治家は民衆に依つて選擧されなければならぬものであるから、その點に於ては實に弱い商賣である。宗教家は民衆の選擧に依つて成るのでないから、民衆に對しては暗愚なりと云ふことを說くのが宗教家の本領である。政治家が煽動るからと言つて宜い氣になつてはいかぬ、民衆といふものは暗愚に違ひない、世界の歷史が之れを證明して居る。民衆が跋扈したる時その國が進歩するものではない、露西亞の如きは最も明白であるが、露西亞には限らぬ、英吉利でも亞米利加でも、何處でも民衆がバタバタしたならば、その國の工業も衰頽し、政治も腐敗し、結局は國家の進運といふ者は止まつてしまふのである。今日普通選擧を唱へる人が、普通選擧をやつたら忽ち國が盛んになるといふのは嘘ツパチである、彼等は世の中に普通選擧を行うて何の弊害があるか、一つも違り損ひは無いと言つて居るが、これは眞面目に嘘を言つて居るのである。違り損つた實例があれ程あつても無いと云ふ、さうすると何も知らぬ者は成る程普通選擧は善いと思ふけれども、瞞されてはいかん、その證據は大有りで、餘る程ある。日本の如きも今日の狀態に於てさう云ふ事をやれば、必ずや失敗が來る。私は何も普通選擧を絶對に反對と云ふのでないけれども、さう云ふ事をワイ〳〵やつて居つても駄目である。やはりもう少し人心を教化する方面の事を盛んにして、宗教なり道德なり、人心教化の事が十分普及して、人格がもつと高まつて、而て後に普通選擧もやるが宜いけれども、今日の如くに人心が頽廢して居る時には、到底普通選擧などを行うても旨く行くまいと思ふ。

其處で露西亞などもやはり後悔をして居るので、今日の西比利亞の狀況は、昨今新聞の傳ふる所にも明かであるし、私は彼の地に行つた人からも早くから聞いて居つたが、一番西比利亞の恢復の方向に向つた端緒は、先づどの教會も小さいながらも建て直して、壞された所は繕ひ、逃げて居つた坊主が歸つて來て、さうして教會に於て說教を始めて居ることである。國民はみな恐怖の情に襲はれて、「過激派も恐ろしい、泥棒も恐ろしい、あゝ世の中は生きながら地獄か」と云ふやうな氣分になつて、せめてはお寺にでもお參りしやうと云ふので、皆なお寺に集つて居る。であるから世の中の秩序の恢復の端緒に就く時は、先づ宗教に歸るものである。日本の今日の思想の動亂でも、これが眞に覺醒されるのは、宗教の力を俟つべき方向に向つた時、この思想の動亂が恢復されるのである。僅かの學問を煙ね廻して、此方の學說だとか彼方の學說だとか言つて居る間は、何時迄もこの動亂といふものは熄まない、一つ高い所に眼をつけて、宗教の信仰に向つた時初めて安定を得るのである。故に左樣な事を主張し指導するのはやはり、天才的賢明なる宗教家といふものが、相踵いで世に出なければならぬのである。

それで佛教徒はこの三つのもの、即ち佛樣なり、佛樣の教なり、その教を傳ふる所の僧伽に對して歸依信仰を捧げるといふ事が無ければ、佛教徒とは言へないのである。今之を日蓮主義者の方から申せば、釋迦如來を久遠實成の本佛として戴き、佛陀の教すべてを奉ずるのではあるが、その中心として法華經を戴き、佛弟子は總べて尊敬するが、就中本化上行の再身日蓮大士を我等の指導者として戴くのである。釋迦と法華經と日蓮とを奉じて、それに依つて我等の信仰は導かれて行くものであります。故にどういふ風に釋迦如來を自分が考へて居つたら宜いか、朝顏を洗つた時、我等の心が佛に對する考へ方がどうであるか、又その遣し給ひし法華經に對する自分の考へがどうであるか、又日蓮聖人に對し、その導きに對してどういふ態度を執つて居るかと云ふことを繰返して少くとも日に一度なり二度なり考へ起すといふ事に於て、この日蓮主義の信仰といふものが持續されて行くのであります唯だ南無妙法蓮華經と題目ばかり唱へたからと言つて、それで法華の信心といふ事は言へない、三寶に歸依するといふ意義を忘れたる信仰は、價値なきものであると云ふ事を新言して貰しいのであります。

聖經

形式的信仰を排す

本多日生

沙門ハ是ノ如シ、汝ノ師ノ教誡ハ寧ロ能ク爾ルヤ不ヤ、阿難對ヘテ曰ク、此レ實ニ及ビ難シ。佛言ハク、我レ世間ヲ見ルニ亦道士有リ、佛法ヲ知ラズ藪澤ニ隱居シテ果蓏ヲ食ヒ言師ヲ用ヒズ、當ニ自然ヲ得ベシト、此レ道ヲ得ルカ、對ヘテ曰ク得ズ、佛言ハク、道ハ心ヨリシテ得ン、當ニ師法有ルベシ、是レヲ糜妄ナル信道ノ一ト爲ス。復道士有リ、百草枝葉樂實ヲ採取シ方藥ヲ服食シテ自ラ用キテ仙タルベシト、汝ノ師弟子モ亦此ヲ信ズルカ、對ヘテ曰ク信ゼズ、是ヲ糜妄ナル信道ノ二ト爲ス。或ハ道士アリ、父母ヲ委棄シ、鹿皮ノ衣ヲ著ケ、草蓐ニ臥止シ、被髮ニシテ食ハズ、天ヲ拜シテ道ヲ求メ徒ラニ自ラ困苦シテ成獲スル所無シ、汝此ニ效フカ、對ヘテ曰ク効ハズ、是ヲ糜妄ナル信道ノ三ト爲ス。亦道士有リ、深ク閑處ニ居シ、門ニ有道ト題シ、水火日月五星ニ祭事シ、烹殺シテ天ヲ祠リ、博頰ニシテ福ヲ求ム、汝此ヲ爲スカ、對ヘテ曰ク爲サズ、是ヲ謂ツテ糜妄ナル信道ノ四ト爲ス。

（佛說解憂志阿難經　正大藏　第十四卷ノ二）

この一節は婆羅門教徒の迷信を誡め、及び形式的なる律法に捉はれて居るのを悟されたのであつて、玆に佛教が如何なる意義に於て宗教を開いたかといふことが能く知れるのである、佛教は形式的の宗教を排斥し、迷信を排斥して起つた所の最も精神的なる意義ある宗教であると云ふ事が知られるのであります。

この經文を見ますれば、佛は前段より種々佛教の教の大體を說かれて、「我が教ゆる所はこのやうな事ぢやが、お前の御師匠さんはどんな事を教へて居るか、これよりも尙ほ立派な教があるか」と言はれた時に、婆羅門の教徒である阿難が答へて言ふには、「其は逆も及び難い事で、唯今承づた所に依れば、佛教の教は尊いものでございます」と言つた。其處で佛が更に仰せられるには、「他がこの世間に行はれて居る婆羅門のやり方を見ると、婆羅門の中の先生と言つて威張つて居る者は、さつぱり佛法の事を知らない、自分の唯だ言ひ來つた事だけに捉はれて、さうして藪澤と言つて人も居らぬやうな淋しい所、草などが澤山生へて居る人里離れたやうな所に隱遁して、さうして木の實などを食つて、別段師匠からの教も無く、勝手に考へたとか坐禪したとか云ふやうな事をやつて、それで悟が出來ると思ふて居る、（丁度習ひ損なひの禪宗坊主みたやうなものである。）左樣にして道が得られると思ふか」と尋ねられ時に、阿難が對へて言ふには、「それは逆も得られる譯のものではありませぬ」と言つた。其處で佛が抑しやるには、「それはさうだらう、道といふものは心から得られるもので、唯だ左樣な米を食はんで木の實を食つて居るとか、淋しい所に居るとか云ふ事に依つて得られるものではない、又勝手に考へたりなどしてもいかぬ、師匠の尊き教があつてそれに基いて修養を積んで行かなければならぬ、然るに師の法を知らず、心に光を求めないやり方は、總て迷信である」と言はれた。此處に釋尊の言はれる迷信は、今日の却つて學究的の人の考へのやうな事が、寧ろこれは迷信であると稱せられて居る。「又或る道士は色々な木や草のやうな物を取つて來て、藥を拵へて、仙人になれると云ふやうな行をする者がある、お前の方の師匠や何かもさう云ふ事をするのか」「イヤ決して左樣な事は致しませぬ」と言つた。釋尊が言はれるには、「さうだらうそのやうな木の實を食つて仙人になるといふ事は迷信である、左樣な事は何にもならぬ、前に言つたが如くに、心の光を磨いて、志を立てゝ、天下の人を救ふと云ふやうな事をして行くのが、教の精神である、（普通人が羅漢に就て考へて居るのは、丁度この藪澤に隱居して木の實を食つて居るとか云ふやうな者を云つて居るので、釋尊の攻擊された處を佛弟子がやつたやうな事になつて居るのである）。又或る道士があつて、親を捨てゝしまひ、鹿の皮を着て草の中

に寝て、髪を伸してさうして斷食をして天を拜んで居れば、それで悟が得られると言つて、自分から非常に身體を苦しめたりするけれども、何も得る所はない、汝等はこのやうな事をするか」と尋ねられた時に、「決して左樣な事は致しませぬ」と答へた。「さうであらう、斯の如き事もこれ又迷信の一種である」。第四にはある道士が靜かな所に引籠つて、悟つて居るやうな顏をして、門に「有道」といふやうな看板をかけて、俺はえらい者ぢやと言つて威張つて居る、丁度新興者が大きな看板をかけて居るやうなものである、さうして或は日に仕へ、星に仕へると云ふやうな祀りをして、生物を殺して犧牲を供へる、其から「博類にして福を求む」と云ふのはどういふ意味か分らんけれども、阿呆面とでも云ふものか、面を膨らして唯だ福を得られると思ふて居る樣な事か、馬鹿面とでも云ふのであるか、どうも博類といふ事を色々調べたけれども分らぬ、兎に角さういふ事をするかと尋ねられた時に、「それを致しませぬ」と言つた、「其は結構な事だ、左樣な事をしてはいかんぞ」と言はれた、これは阿蹉等は或はやつて居つたかも知れんけれども、段々前から說かれて押し詰められたので、今更「やつて居る」とも言へないので、「イヤ、そんな事は致しません」といふやうな譯であつたかも知れんが、これも亦迷信の一種であると言はれる、斯くして釋迦如來は婆羅門教徒の形式的なる弊害、或は苦行をする弊害、意義ある所の迷信の弊害と云ふものを攻擊せられた、佛教徒は意義ある事をやらなければならぬ、殊に法華經の行者などが今日この迷信に等しい事をやつて居るが如きは、實に逆轉で、あと戻りをした烈しい事だらうと思ひます、彼等は阿蹉經にも及ばざる事遠しであります。

日蓮主義畸人傳

四、野口日主僧正

朱塗の高足駄に紫太紋の羽織を裾長う穿つて、何とか大きく見せようと力めるが、性來の短軀は僧正の苦心に報ゆべく頗る冷酷である。變物喰ひで、生の辣韮を嚙る、青唐辛を甜める、蛤のむきみに味噌をつけて食ふ、殊に御飯の中味を欲しがる事は尤も有名である。夜淺草公園を散步して、乞食とお友達になつて繩のれんをくぐつたり、深く浪人者と交つて、醉ふて交番の巡査に轉法輪を試みたり、就中此の人にして此病ありと稱すべきは、創合に小心で、妙齡の婦人に包圍されると、ホンノリ顏に淳紅葉して、モチ〳〵して居る事である

妙判

現代の病弊と法華經

本多日生

答フ、諸佛ノ和光利物ノ月影ハ九法界ノ闇ヲ照スト雖モ諸法一闡提ノ濁水ニハ影ヲ移サズ、正法一千年ノ機ノ前ニハ唯ダ小乘權大乘相叶ヘリ、像法一千年ニハ法華經ノ迹門ノ機法相應ゼリ、末法ノ始メノ五百年ニハ法華經本門前後十三品ヲ置キテ只壽量品ノ一品ヲ弘通スベキ時ナリ、機法相應ゼリ、今此ノ本門壽量ノ一品ハ像法ノ後ノ五百歲、機得ホ堪ヘズ、況ヤ始メノ五百年ヲヤ、イカニ況ヤ正法ノ機ハ迹門尙ホ日淺シ、增シテ本門ヲヤ。末法ニ入ツテ爾前迹門ハ全ク出離生死ノ法ニアラズ、但ダ專ラ本門壽量ノ一品ニ限ツテ出離生死ノ要法也、是ヲ以テ思フニ諸佛ノ化導ニ於テ全ク偏頗無シ等云云　三大秘法抄、新遺二〇五二頁

この一節は佛の滅後を分ちて正法千年、像法千年、末法一萬年に區分するが、その內で釋迦如來は何れの時代を目的として居られたかといふと、末法の時代を以て佛は衆生を救濟する一番大切の時として御出でになり、法華經が光を放つのも末法の時である、月は春の月から光つて居るが、八月に至つて十五夜の月が最も爽けく光るが如くに、佛法は末法に入つて尤も光輝を發する、その末法の時に日蓮が生れたから大いに力を盡さねばならぬと云ふ事を述べ來つて、更に問を設けて、佛の慈悲は平等に何れの時代の者でも可愛がつてお救ひなさるべきであるのに、殊更に末法の時と云ふのはどういふ譯であるか、佛の慈悲に偏頗があるに非るかと質ねて、それにお答へになつたのである。

そこでこの御遺文の意味を細かく申すと色々の教義がこの間に現れて來るのであるが、大體日蓮聖人の力を入れて居られる所を了解すれば宜いのである。それは正法像法の二千年には、佛教の小乘教、權大乘教に依つても相當に利益を與へる事が出來る、何故かと言へばそれらの人は前の生に善模を

積んで居る人が多く生れて居る、所が末法となれば、過去にそれだけの因緣のある人が少くなつて來るから、攫根が劣つて來るが故に教の力が強くなつて行かなければならない、病氣が重くなれば藥の力の強いものを持つて行かねばならぬやうな譯で、末法の時には一番善い佛法を用ひなければならぬと云ふ事になる。病の輕い者に弱い藥を與へたからと言へて、何も醫師が不公平と云ふ譯のものではない、斯ういふ意味合をお說きになつて、今や末法五濁の衆生は、どうしても佛法の眞實の法華經、法華經の中にも本門、本門の中にも壽量品の最高の教義、絕對の教義に依つてこの人を救はんければ、到底救ふ事が出來ないといふ事を仰しやるのであります。その違ひはどう云ふ譯であるかといふと、色々深い意味もありますけれども、簡單に申せば第一に本佛釋尊に就ての意味合が壽量品でないと能く現れて來ないのである。それで家に就て云ふと親なり家の生命が續いて居るといふ事が最も大事な事である、又國家に就ては皇室の尊嚴と國體の續いて居る事とが大事である、その通りで佛教に就て申せば、本佛と本佛との上に一切の法なり實相なりがその中に裹まれて現れて居る、その法佛一體の本佛といふものが最も大事なことになる。家に就て言へば家の生命が滅び、親も亡くなつて子供も無いといふ事になれば、家は斷絕であつて、あとに殘の中にどんな寶があつても、蒔繪の重箱があらうが、黃金作の刀があらうが、家の生命が斷絕してしまつた時には、何にもならん。佛教に於ても本佛が斷絕して無くなつてしまひ、宇宙の眞理が佛と離れて行つた、それは佛教の滅亡といふものである。であるから壽量品が大切であるといふ事は、そこが一番有難い點であつて、そこを明かにしてあるのは壽量品に限るのであります。他のお經ではその意味合が分らない、同じ法華經の中でも方便品をやつて居るのでは、本佛の絕對といふ事が分らぬ。これは唯だ佛教の中の法華經の問題のみではない、今や世界全體の思想がマゴついて來たのがそこである、非常な鞏固な哲學的の眞理と、有難い絕對の神佛とが結びついて、吾々は知識の方からも又信仰の方からも絕對の尊敬を拂ふ事が出來たならば、こんな煩ひは決して起らないのである、何と言つても西洋の文明が壞れて來た原因は、哲學を侮り、宗教を侮り、隨つて道德の根柢が動いて來て、哲學、宗教、道德といふものゝ權威が失はれた時、今日のやうな病弊が起つて居る、それ故に彼等惡い思想の人は皆言つて居る、「哲學なんて面倒な理窟に騙されるな、宗教のやうな古臭い事に誤魔化されてはいかん、彼等は何を言はふとそんな事を聞くな、兎に角吾々は腹が減つて居るからパンの問題が一番大事だ　何の理窟もへちまも無い、この減つた腹に何を食はして呉れるか、是で行かなければならぬ」と言ふ。其處で「其は大きに尤ぢや、緩くり話しなんて聞いて居る樣な、呑氣な譯ぢやない、」と云つて「パンをよこせ」「軀身を食はせ」と言つて騷いで居る。併ながらそれは彼等惡思想の者の手に乘つて居るのである、それは人間食はずに居ては容易な事ではないけれども、退いてどうしても精神の問題に入らんければパンも祿に生じては來ないのである。露西亞を見れば能く解る、唯だ「パン〳〵」と言つた結果は饑餓に迫つて、皆が路傍に出で「パンを與れ」と言つて居る。日本は未だ左程にパンを喝ばんから、露西亞のやうに皆が乞食になつて、立派な家の奧さんなどが路傍に立つて「パンを一片與れ」といふ樣な現象は來にしたくも見られない。併ながらパンパンと言つて居ると終には皆乞食になつてしまふ、そんな事はお釋迦樣も言つて居る、決して宗教を信ずるからと言つてパンの問題を捨てるといふのではない、寧ろ人間が精神生活に入ると慾望といふものを制限して行く事が出來る。要するに人間が唯だ物質にのみ愉快を求めやうとすれば、どうしても要らぬ物品でも買ふとか、贅澤をするやうになる、精神に渴するが故に酒でも飲むとか、美味い物でも食ふとか、舌を刺戟し耳に響きを與へて置くとかしなければ居られなくなる。今日も私の所に來た婦人が有りましたが、如何にも同情に堪えぬと思ふ、相當な家の人だらうと思ひますが、今迄は娘と一緒に暮して居つて、人生は樂しいものだと思つて居た、今考へるとどうして樂しいのか分らぬが、兎に角樂しいとばかり考へて居つた、所がこの可愛い娘が十六になつて盲腸炎で一週間でパタリ死んでしまつた、モウ樂しみなんてものは人生に無い、希くは總ての人が一緒に死んでしまへば宜いと思ふやうであつた、どうしたらこの辛い惱みが除かれませうか、あなたの本も讀みましたけれども、どうも分つたやうな分らぬやうな工合で旨く行きません、といふ事であつた。私に會ひでもしたらその惱みが除れるといふやうな譯でありませうけれども、中々さうはいかんから、兎に角お經を讀んで上げませうと言つて別れたのであるが、さういふやうな譯で中々人間といふものは精神上の問題へといふものに出會ふた時にはどうにもならぬ、それ故に能く迄もこの法華經の如き廣大なる教に依つて、精神の安定を計つて行かなければならぬのであります。それから又人間は未來の事は遠いやうであるけれども、どうしても生命の問題から考へて行かぬと、「可愛い娘が死んだ、さあどうする」といふやうに、直ぐ生命の問題といふものが出て來る、これは死んでからの事ではない、人間の精神の安定を圖るには久遠の生命、不滅の生命といふ問題に直ぐ觸れるのであります。その不滅の生命といふものに就ては、佛教でなければ能く分らん、殊に壽量品でなければ、眞に生死を解脫する事は出來ないと日蓮聖人は仰せられたのであります。

教義　日蓮聖人教義綱要（第三十九）

井村日咸

第九章　得益

第四節　相對の利益

吾人は其發心の當初に於て、我等の現在生活が、自己の本性と大なる距離あることを、自覺して發起した信仰の一念であることであれば、今や吾人が其得益を得る場合に於ても、我等が身心の苦惱を除却し得ることであらねばならぬ、吾人の醜惡なる我欲を滿足せしむる事を以て信仰の報酬なりと考へたならば、大なる誤と言はねばならぬ、日蓮聖人云く、

夫人に二の病あり、一には身の病、所謂地大百一水大百一火大百一風大百一已上四百四病也、此病は佛に非らざれども之を治す、所謂治水流水香婆扇鼓等が方藥此を治するにいかで癒へずといふ事なし、二には心の病、所謂三毒乃至八萬四千の病也、此病は二天三仙六師等も治し難し、何に況んや、神農黃帝等の方藥及ぶべしや。（縮遺二〇九八）

と、身の病は世間の醫師之を治療するも、心の病たる貪瞋痴の三毒は世間の藥法の治する所にあらず、心の病は教の力に非ずんば之を治する事は出來ないのである、現今の誤れる信仰者は信仰に依つて身の病を治し、產業の隆盛を計る者あるも、此等の信仰は自覺せざる信仰、醒めざる信仰であつて、正しき信仰と言ふ事は出來ない、隨つて此等の信仰に依つて一時利益を蒙るが如き現象ありとするも眞實の利益ではない、自己の精神上の影響に依る一時的現象に過ぎない、此等は本節に言ふ眞實の利益と云ふ事は出來ないのである、經に現世安穩後生善處と說き、當於今世得現果報と說けるは斯る自覺なき信仰の上に現れたる得益ではないのである、自覺なき信仰の得益は一時的のものであるが故に其當座は滿足する事を得んも、之を失ふの時は更に大なる苦痛を感ぜねばならぬのである、眞實の利益を言ふは得たる以上失ふ事なき者でなければならぬ、我等が實生活に於ける苦痛は物質の缺乏に依るよりも、精神的欲求の過大なるに依りて受ること甚大なるものである、そこで佛は物質の供給を計るよりも、其欲望の制限を策すべく教誡せられたが、此佛教なるものである、佛陀の教を信じて、益々凡欲を遏ふせんとするが如きことは有り得べからざる事であらねばならぬ、佛陀は最初の說法たる小乘經に五停心觀を說いて貪等の五過を停めしめられた。

一、不淨觀　身體及一切の財物に對して不淨なりと觀じて之に貪著するを停め、以て貪欲を治す。

二、慈悲觀　一切衆生は已が父母兄弟の如しと觀じて瞋恚を治す。

三、因緣觀　十二因緣を觀じて因果應報の道理を明め、以て愚癡を治す。

四、數息觀　出入の息を數へて心を靜め、以て散亂の心を治す。

五、念佛觀　佛の身相及び功德を觀じて其加護を仰ぎ、以て種々の障碍を治するなり。

此五停心は佛教入信の初門であるが、先づ自己の心內に生起する五過を停止して後、始めて其教に入り得る次第であつて、五過を滿足せしめんが爲めに信仰に入るが如きことは佛陀の許容し給はざる處である。

無量義經十功德品には此經を信ずるもの〻功德十種を擧ぐ、其中第一は現世相對の利益を擧げたのである、文に

此經は能く苦惱の未だ發心せざるものをして發心せしめ中略煩惱多きものには除滅の心を起さしむ、是を是經の第一の功德不思議の力と名く。（全文第八章第九節の中に引く往見）

と、是經の利益は吾人をして煩惱的發作を停止して、十善六度の善根を作さしむるものなりと說かれたのである。

吾人は今や過去遠々劫の長き闇より目醒めて、佛陀大慈の光明に接し、妙法の大信仰に安住する事を得て、臨終を期して靈山に往詣し、佛身を成就するの大幸福を得たるこの滿足、

この歓喜、到底筆舌の顕示すべき處でない、此大滿足大歓喜の溢れる處、此が吾人の得たる現世得益の最大最勝なるものである、大歓喜大滿足を得て身心適悅する處何ものを以てか此に比するを得ん、世人の些少なる利益を得て滿足するが如き未だ此歓喜を得ざるに依るが故である、經に、舍利弗佛に申して言さく、

今佛に從つて未だ聞かざる所の未曾有の法を聞いて、諸々の疑悔を斷じ、身意泰然として快く安穩なることを得たり。

（縮法一〇四）

我是法音を聞て未曾有なる所を得て、心に大歓喜を懷き疑網皆已に除りぬ。（同　上）

と、成は歓喜充徧身と說き、歓喜率行と說けるものは、皆此經を信ずるもの〻得益を擧げたるものである、此歓喜滿足の精神は、徹て肉體に及ぼして彌が上に健全に、病あるものを治癒することを得るであらう、經に

此經は則ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり、若人病あらんに是經を聞くことを得ば病即ち消滅して不老不死ならん

（縮法、四一八）

此經は能く一切衆生を救ふ者なり、此經は能く一切衆生をして諸々の苦惱を離れしめ、此經は能く大に一切衆生を饒益して其願を充滿せしむ。（縮法、四一四）

と說くもの、皆是歓喜滿足の生活に入るより起る處である、此を是經の現世の利益と言ふのである、此歓喜滿足の生活に入るが故に、法華經の爲に、留難に遭ふも敢て苦と爲さゞるを得るのである、聖人開目鈔に、

當世日本國に第一に富る者は日蓮なるべし、命は法華經にたてまつる、名は後代に留むべし、（縮遺、八〇二）

日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかはしからず、後生には大樂を得べければ大に悅ばし、（縮遺、八二四）

と、又、如說修行抄は、

哀なる哉今日本國の萬人、日蓮並に弟子檀那等が三類の强敵に責められ、大苦に値ふを見て悅んで笑ふとも、昨日は人の上、今日は身の上なれば、日蓮並に弟子檀那共に霜露の命の日影を待つ計ぞかし、只今佛果に叶ひて寂光の本土に居住し自受法樂せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値はん時、我等何計無慙と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん、一期を過る事程無ければ、いかに强敵重なるともゆめゆめ退ぞく心なかれ恐る〻心なかれ、縱ひ頸をば鋸にて引き切り、胴をば菱鉾を以てつゝき、足にはほだしを打て、錐を以てもむとも、命のかよはんほどは、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死るならば、釋迦多寶十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來りて手を取り肩に引懸て靈山へはしり給はゞ、二聖二天十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は天蓋を指し旗を上て我等を守護して慥に寂光の寶刹へ送り給ふべき也、あら嬉しや、〻〻、（遺法、九七二）

と、開目抄に「大に悅ばし」と云ひ、本抄に「あらうれしや」と言へるもの、此信仰に依つて佛果を莊嚴するの歓喜滿足は現在の小苦を以て換へ難きものなるを仰せられたので、此歓喜滿足の心狀は現在生活をして歓喜充徧身の法悅的生活に導くのである、經に

常に二食を以てす、一には法喜食、二には禪悅食なり、

（縮法二二七）

と、物質的美味の食物に依らず、精神的喜悅の滿足生活を爲すを說けるものである、此法悅的生活此を現世相對の利益と言ふのである、此法悅生活は火も燒くこと能はず、水も漂はすこと能はざる精神生活である。

吾人は斯く法悅的精神生活を營むことに於て、現在生活を意義あらしめ、此國土を漸次に淨化して遂には寂光淨土の面影を實現すべく期待して居るものであるが、然し我々は過去世に於ける闇黑生活に於て、幾多の債務を負ふて居るものである、吾人の自覺的信仰生活は此舊債を辨濟せずしては其目的を達することは出來ない、法華の行者値難ある所以である、聖人開目抄に示して曰く、

鐵を熱にいたう鍛はされば疲隱れて見えず、度々せむればきず現る、麻子を絞るに强くせめざれば油少きが如し、今日蓮强盛に國土の謗法を責れば此大難の來るは過去の重罪の今生の謗法に招き出せるなるべし、（遺法、八一八）

と、强盛なる信仰者は安穩の生活を營まんと計らんよりは、過去世の舊債を如何にして速かに辨濟せんかと計るが急務であらう、此舊債を辨濟し得ることが現世得益の一方面であることを考へて置かねばならぬ。

雜錄

私の婦人觀

安西千賀夫

次に私は現代の婦人に育兒に對して極めて眞摯なる自覺あらん事を望むのであります、私共子供を持つて居りまするが、子供を育てることは實に容易ならぬ事で、殊に日夕圖餌を見て居りまする母親の苦心たりや當一通りではないのであります、其の上不足勝な家庭に於きましては子故に泣かされる事も少くないのでありますが、併し子供は實に天眞爛漫愉快なもので、其の間云ひ知れぬ慰安を與へられまするのみならず、俗に子寶と申して眞に子に勝る寶はないのであります。併し假りに子供が縱令子寶でなかつたにしても、又不足勝の家庭で如何に苦痛が伴ふものにしても、婦人は此の育兒に付て極めて眞摯なる態度を要するものと信ずるのであります。抑も生物は多く其の父を知らぬのでありまするが、其の母を知らないものはないのであります、又母の感化を受けぬものはないのであります、猫にしろ、犬にしろ、乳は誰が啣ますのでありまするか、其の糞便は誰が始末を付けるのでありまするか、皆之を產み落したる母猫母犬の爲すべき所ではありませぬか、而も之等の猫や犬が子を育てるに當つては、恰ど狂氣になつて居る、あの鷄などでも巢について居りまする時には、人が近づくと毛を逆立てて怒る、此の如き熱あり血があつてこそ始めて子供は育つのであります、若も假に是等の母猫母犬が啣育の責任を拒絕したならば其の結果は如何なるのでありませう、生れながらにして歩きもする、比較的自然に依親する事の多い動物界に於てさへ斯の如きものでありまする以上は、生物の間に於て最も弱い、又最も手數のかゝる人類に於て、母親が啣育の責任を拒絕して良好なる結果を得樣と云ふ事は如何にしても考へ得ないのであります、然るに若も子供を育てる事を五月蠅がつたり、母乳に代ふるに牛乳を以てし、母の愛に代ふるに無教育な女中を以てする樣なことがありとしますならば、子供は何人の愛に浴し何人の感化を受けて育つのでありませう、良家の家庭に於て却て良くない子供の出來る事のあるのは或は此の邊に証跡するのではないかと思ふのであります。而して私は西洋文明の主なる缺陷も此の點にある事を確信するのであります、私共の狹い見聞の範圍に於きましても西洋婦人は避姙を講じ、又育兒の責任を回避する傾向が比較的に多い、之は文明の進むに從ひ、生活上の問題等から歸因して居るのでもありませうが、一は所謂享樂主義の人生觀などから出て居るので、動物など程も子に對する觀念が眞面目でない樣であります。此の點が非常に識者の憂慮して居ることで、現在世界に覇を唱へて居る白人の將來も永くないであらうと云ふ悲觀論は此等の點に立脚して居りまするので、西洋文明を受け入れまする我々は餘程戒心を要することゝ存じまする樣に觀察して居ります。

私は白人に比べますと其の體力に於て、其の智力に於て勝つて居るとも思ひませぬ我邦人が、僅々五十年間に於て異數の發達否殆ど神秘的の發展を遂げました所の、隆々たる國運の原因は種々あるでありませうが、其の主因を爲して居るものは彼の母親が子の爲に殆ど一身を捧げて盡しまする慣習のある、我邦の固有道德に負ふ所多いことを信じ、此の道德は縱令世の中がせち辛くなりましても、益々發揮せしむることを要し、趣味と快樂は之を外に求めずして、常に之を家庭に求め、子供の教育を以て無上の光榮ある天職と信ぜしめ度ものと思ふのであります。

以上の如く私は根本的の婦人觀を有つて居りまするので、時代後の思想であるが、又誤謬の點があるのかも知れませぬが、其の時代後たると誤謬論たるとは問はず、更も角婦人は家庭的のもので、夫を扶け子を育つることを以て天職であると信ずるのであります、以上の前提の下に更に我邦の婦人を西洋婦人に比較し、其の劣つて居る處と思ふ事などに付て申述べ御參考に致し度と思ひます。

第一に申上度事は、西洋婦人は日本婦人に比べますると餘

程教養の高いことであります、此の點は日本婦人は西洋婦人に餘程學ぶべきものがあると思ひます、西洋婦人は其の智識の程度、其の學問上の修養、我婦人とは比べものになりませぬ、彼等は好んで書を讀み、汽車の中でも、船の中でも本を讀んで居る、勿論其の總てが硬いものばかりではないが、文學上の話にしても、社會上の話にしても、中々に意見が立つ、堂々たる男子が赤面する樣なことも少くない、曾て私は米國婦人に關する記事を讀みました時に、男子は只其の日其の日の劇務に追はして殆ど讀書する暇がないので、宗教や、藝術や、文學や、其の他一般の思想問題等に付ては、細君の方が亭主よりも一歩進んで、夫は常に細君の指導を受くると云ふ記事を讀んだ事がありますが、如何にも左樣ではないかと思ふた事が船中で實驗致しました。即ち船中で二人の貴婦人に悪意になつた、一人は七十前後の老婦人で其の名をリードと云ひ、今一人は其婦人の娘さんの三十前後の貴婦人でありました、若い方のはミツセスフエゲンと云ふて神戸に於けるロイド監督の夫人であります、そして此の貴婦人は母を伴れて濠洲から神戸に至る所であつたのであります、此の兩婦人は如何にも品の善い相貌を備へ、女中も付て居りますのに拘らず、女中の手を煩はさずに若い夫人は常に子供に何か本を讀んで聞かせて居り、老婦人は傍で本を讀んだり、話したりして居る、其の氣品から子供に對する態度などが如何にも我邦に於ける良妻賢母の典型であるかの如き感がしましたので、心から敬慕の念の起るのを禁じ得なかつたのであります、或る日の事私が讀書して居りました時に、御婆さんから貴殿は毎日幾時間本を讀むかと云ふ質問を發せられました、そこで私はしかじか斯樣々々と答へますると、それはオーバーウワークである、ツーハードであると云ふ話から、此の兩婦人と懇意になりまして、色々な話をしたのであります、話題は濠洲に於て私が觀察しました事、濠洲婦人に對する思想、社會問題等に關した事で、男子でも相應高い教育を受けた者でなければ感興を惹かない事が、先方の興味の中心であつたのでありますのに一驚を喫したのであります、中には貴殿の奥さんは貴殿自身選擇せられたのですかなど云ふ際どいのもありました、勿論是等の婦人の如きは先方でも異數に屬する方であるかも知れない、併しながら西洋の婦人が能く本を讀み、一般に教養の高いことは之は到底日本婦人などの比較にならぬ事と思ひます。

記事

巡回教化

願ねば我統一團社會部が、其活動を開始してより、此所に九ケ月間、或は雪と戰ひ、或は風雨と戰つて、一と通りならぬ辛苦を嘗めて來たが、九ケ月間に講演會を開催する事、大人會四十二回、一萬五千四百五十名、小供會三十五回、一萬二千九百五十名に達するの好成績を擧げたのである。これ社會部の活動が如何程、時代に適應したるかを示すと共に、又以て同人の苦心も其所に存するのである。

宗教の講演會に於ては、散らし廣告の一割、聽衆が集れば大成功である。最も聽衆の多寡は、講師講題及び日時場所天候等の關係に依る事勿論なれど、廣告が徹底せるや否やも、重大なる問題である。

國友先生が九月號に於て『思想戰は其極き軍戰と毫も異ならず』然して『本多總裁閣下親率の下に、四十三瑚の巨砲は連續して打放たれ』と仰せられたる如く、講演は巨彈にして、廣告の散布は偵察戰であり白兵戰である。四十三瑚の巨砲をして、其威力を振はしめ、敵軍を粉碎せしむるは、偏に偵察戰の如何に依るのである。

近頃は、政治運動許りでなく、宗教運動に於ても、廣告を十萬撒いたと、二十萬撒いたと、其數までも新聞へ書きたてる樣になつたが、其撒き方を見ると、未だ敵軍へ接觸せざる前人馬の砂烟を見て、あわたゞしく機關銃を氣射するが如く、恰もドンキホーテイが、水車を見て騎士と思ひ、鎗をすごいて突き掛るやうな有樣である、これで好果が得らるゝならば、戰術も無用である。

若しも二十萬の廣告を、吾等同人の手に託したならば、少く共東京半分は、震動せしめて見せる。うごくてらの聽衆が……斷つて置くが、彼等は日蓮主義者でないのは勿論、修養講話を聞くのも、生れて以來初めてと云ふ人が大部分を占めて居る……平均三百名以上あるのも、決して廣告を、一萬二萬と撒いたわけではない、近頃は一個所二回が、大抵五百枚足らずで、二日間に六百名、小供會を合すれば千二百名以上ある。今迄は四方を開放して置いたから宜しいが、これから寒くなつて、四方の垂れを付けると、國友部長の理想通り、切符制度にしなければ、到底收容しきれなくなるのである。

却説、其五百枚の廣告を如何に散布するかと云へば、會場を中心にして、四方をぱどラ廣告で圍み、內部は細密なる偵察を遂げ、距離を許り、メートルを定めて、一齊に突擊を開始するのである。突擊に突擊を重ね、接戰愈猛烈に白熱化すれば、舌端よりは火を發するが如き感がある。廣告は一々丁寧に說明して、先方の得心したる其時を目掛けて、息もつかせず、電光の如くに突き出す……三尺の秋水にあらず……これぞ正しく法華經の利劍、南無妙法蓮華經と書いたる經木である。アット驚く時は早や遲し、同人の銃彈確かに手答へあつて、『どうも御苦勞樣』とたゞ經木を、押し戴くのみである。然し多くの中には、銃彈に打たれながらも『家ではそんな物いりませんよ』と申く者がある、其時には益々追擊して『では廣告丈も置いて行きますから』と云へば『いや、それもいりません、持つて行つて下さい』と意地惡く出る。此時位情なく感ずる事は、恐らくあるまい。多大の費用と勞力とを以て、國家社會の爲に奉仕して居るのに、唯單に南無妙法蓮華經の文字を見て、緣起でもないと許りに、塵も搖きかねまじき見幕で追ひ出す。然し此時同人は必ず『彼等は惡知識の爲に誤られて、斯の如き邪道に落ちて居るが、この逆緣に依つて何卒法華經に歸り、自他共に救はるゝやうに』と心にて祈るのである。

今迄述べた事は、廣告の大切な事よりして、吾等同人が、如何程それに苦心して居るかの一端を、紹介したのであるが、要するに、如何にしたならばもつと遠かに、法華經の廣宣流布が出來るかといふ、苦勞の一つである。

□—九月二十日品川町二日五日市に於て彼岸會法要並に講演會、畫小供會三百名、川島松雄、高木日靖。夜大人會三百名、(開會之辭)中村藤吉(うどくてらの趣意)高木日靖(日本人の特徵)笠川日堂。餘興講談、桃川蝶花。□—九月二十一日同所、畫小供會三百五十名、川島松雄、高木日靖。夜大人會三百五十名、(開會之辭)川島松雄(心の光り)國友部長。餘興講談、桃川蝶花。□—九月二十三日本所區御島元町に於て彼岸會法要並に講演會、畫小供會三百名、高木日靖、中村藤吉、川島松雄。夜大人會四百名(開會之辭)中村藤吉(うどくてらの趣意)川島松雄(思想問題と法華經)野澤少將。餘興講談、桃川蝶花□—九月二十四日同所、畫小供會三百四十名、高木日靖、中村藤吉、川島松雄。夜大人會四百五十名(開會之辭)高木日靖(精神修養に就て)國友部長。餘興講談、桃川蝶花。

本所、深川は非常に有望なれば、此方面へも事業を擴張せんと、統一團員本所深川在住の人々を以て、先づ巡回教化本所深川後援會を組織して、今回初めて開催せしが、其効果甚大なれば後援會々員は今後此方面の開拓に一層努力せんと誓はれたり。

各地の思想戰

法華經要文講義

△**名古屋市**　中區新榮町常德寺に於て、九月十五、十六日夜七時より開講す。來聽者兩日共約八百名。一回は一回毎に內容實質の精撰されて、今や研究より信仰に進まんとし、中京教界の中堅は連月の要文講義によりて築き上げられんとす。法國の爲慶賀々々。

△**四日市**　諏訪公園圖書館に於て、九月十七日夜七時より開講、生憎の雨を冒して集るもの二百餘。此地既に新寺建設の工事に着手す、功德亦甚多なり矣。

△**大阪市**　西高津蓮成寺に於て同十八、十九日夜七時より開講す、兩日共聽衆五百名に餘り、爲に同寺の本堂は立錐の餘地なく、而して講演會の盛況なるとき、群衆心理は聽衆をして靜肅に謹聽せしむるに、兩夜の法益無量なり。

此處に特筆大書すべき事あり、伊豫の國新居郡の岡本忠道氏は、海陸實に十有八時間の行程を旅行して每會缺かさずこの要文講義に來聽せり、世は末法と聞くに求道の誠意眞に敬服に堪へず。

△**神戸市**　例月の會場カフェーを變更して、共進會跡の勸業館樓上に、九月二十一、二十二日夜七時より開講す、同館はカフェーの約三倍の大さあり、室內の裝飾壯麗に、且つ位置は公園內に存在する爲四圍靜寂にして、精神の問題を講ずるには最適の會場なり。神戸市の布敎を特命せられたる能井本光師は、この絕好の會場を得て勇躍歡喜、更に熱誠なる聽衆を以て同館を充溢せしむべく一大努力を試みたり、即ち或は七八兩月に亘り青年團員を率ひて道路布敎に、或は炎熱を冒して連日連夜各所の講演に、最後には神戸市內外の同志に總動員の軍令を下して大看板に宣傳ビラに、努力々々、一切の努力を盡したり、其の結果二十一日來聽者約一千百名、二十二日雨模樣なりしも約八百名に達す、其功金鵄勳章に該當すと謂ふべし。

△**京都市**　寺町二條妙滿寺に於て同二十三、二十四日夜七時より開講す、兩夜共聽衆四百名。二十四日夜講演終了後會場に遺品あり、水引のかゝりし黑檀の拍子木と扇子となり、

認めし文字に曰く、念佛の一信者妙法に歸伏致候云々。近時要文講義の立看板を破棄せらるゝ事頻々たり、以て二載の反響を卜すべし。

東海道地方

△統一團名古屋支部南部分會發會式　青年林幸太郎君に依つて、連月開催せられたる思想問題講演會は、先づ同君の一族を動かし、更に名古屋市の南郊に强烈なる刺戟を與へて、遂に具體化して統一團分會となり、九月十三日を以て八幡村大正座に於て、其の發會式並に講演會を開催す。果然三障四魔は紛起せり、或る部落は決議して一般の來聽を止め、或る部落は青年全部出動して宣傳ビラを破棄す。喜ばしい哉、思想戰の首途に芽出度き瑞相にこそ、日蓮聖人曰く、魔起るが故に法正しと。奮進せん哉、奮進せん哉

中京の南郊を日蓮主義化する迄。

宗教の權威と時代の要求　國友支部長

此處思想界の關ヶ原　山内櫻溪氏

人類文明と佛教　本多總裁閣下

尙祝辭祝電を寄せて本分會の出誕を聲援せられたる諸氏に感謝す。

△九月十二日　午後七時半より豐橋妙圓寺に於て龍口法難六百五十年紀念法要を營み次で講演會を催す。この日少年會を併催せし爲め參詣者本堂に滿ち、堂内立錐の餘地なく溢れて屋外に立つ。先づ多年教育に從事せし大竹直治君、日蓮主義的お御祈に滿堂の聽衆を醉はしめ、次で御難會壯丹餅の供養あり、山内櫻溪先生「今昔の感慨」なる題下に、一般聽衆に多大の感動を與へ、終つて餘興三遊亭チャップリン、同圓助の落語あり。午後十一時閉會す。

△九月十八日　午後七時半より豐橋妙圓寺に立正會例會を開く、「邪先經の概觀」松本師。「思想問題に就て」加藤少將の講演あり。當日池田少佐加藤軍醫等新に入會す。

△十月五日　夜西春日井郡新川町日宗教會所に於て例會講演開催、聽衆一百名。

物質より精神へ　國友文學士

自信教人信　山内櫻溪氏

久留米地方

△八月五日午後二時正信會「信仰と生活」中原師△八月七日晩八時、久留米天晴會例會「法華經要義」(其五)中原通應「領解と徹底」中原法學士「徹底的自覺」江藤正人。講師の熱辯と聽衆の熱心なる聽聞と相俟ち効果甚大△八月十二日同信會講話「自慶安住」中原師△八月二十一日午後八時久留米天晴會「武士道に就て」江藤正人。「佛教哲理の進化」(其八)中原龍已法學士「法華經要義」(其六)中原通應、△九月二日午後二時野瀬本吉宅に於て天晴會巡回講話「佛教と實際問題」中原師、△九月四日午後八時久留米天晴會「精神生活」江藤正人。「日本及日本人」倉富晉龍郷。「法華經要義」(其七)中原通應、△九月五日正信會開催「信仰の正系」中原師△九月十二日龍口法難會法要勤修、午後八時講演會及同、聽衆滿堂「日蓮聖人の三大願」出海俊義。「日蓮聖人の立正觀」中原通應。

△九月十八日　朝鮮釜山天晴地明會長横山惠正師來米、時恰も久留米天晴會例會當日なりしを以て、午後八時より一席の講演を請ふ。

法華經要義(其八)　中原通應師

日蓮主義と現代　横山惠正師

講演後、横山師は會員の熱望により、朝鮮に於ける宗教狀態、及び軍事、教育、風俗習慣等に就て快談せられ、會員又能く謹聽、薫化普く及ぶ。

△九月廿六日　午後二時第十八師團經理部下士團は、久留米博集館に會し、修養講話會を開く。

西比利亞派遣軍に就て　橋本經理部長

日本建國の精神　中原通應師

△九月三十日辻浸次郎宅に巡回講話を催す、「我が國體の精華」中原通應師

伯耆松崎地方

△八月二十日、舍人小學校處女會に於て、「眞と僞」富田日進師△同十五日、夜松崎町本立寺に於て尼港殉難者追悼法要を營み、終つて講演會を開催す、多數有識階級の參拜あり、頗る好成績なりき。「嗚呼殉難の士」林慶順師、「思想の關學」河谷日荏師△九月十日、夜東伯郡西小鹿村前田熊太郎氏宅に於て、聽衆五十名。「天台と日蓮の法華經觀」富田日進師△同十六日、鳥取市聖教園の爲に、「妻婆即寂光論」富田日進師△同十九日、夜東郷村市橋昌晴氏宅に於て幻燈講演會を開く、聽衆百五十名、富田日進師、中島孝治氏等の講演ありたり。△同二十日、倉吉町隆泉寺に於て幻燈講演會、聽衆百餘名、「國と法」富田日進師。

北都金澤地方

△九月二十二日本長寺に於て講演、「日蓮聖人と佐渡ヶ島」、雀田純榮師「宿緣深厚」石橋會章師△九月二十六日、本長寺に於て天晴會「宗教の起原と法華經」雀田純榮師「蓮景品の要義」石橋會章師「大聖御傳繼講」小鳥由之助氏△九月二十七日、信徒笹川宅にて講演「眞の信仰と迷信」雀田純榮師。

天晴會は一般的有識階級の聽衆にして他宗派の人大部分を占め、軍人教育家警師官吏等あり、又例月講演は純善の信徒に幾分の異宗徒

を加へたるものにして是又進展しつゝあれば他日の好果期待するに足るものあらん。

京都地方

△**顯本健兒會** 毎月一と六の日開催、萩原金光有田村岡今井辻高岡等の諸氏盡力の結果、毎會三百有餘名の來會者ありて、益々堅實なる發達をなしつゝあり。

△**日蓮主義講演會** 十八日午後七時より、妙滴寺講堂に於て開催、「當體淫祭論」村岡本章師、「唯我獨尊」有田宏道師「窮子驚愕稱怨大唱」金光布教師「日蓮主義の人生觀」萩原本山部長。

本山及寂光寺、本正寺、久遠寺、同志會等の例月講演會には、萩原、金光、有田、村岡の諸師等出演せられたり。

千葉縣下

△十月十二日、長生郡長柄村味庄光明寺に於て、宗祖聖人御會式に際し、大幻燈應用講演會を開催す。説明者木村令快、海老澤乾樹、竹内觀領、山田誠心、斉澤志正。暴雨に關らず來聽者六十餘名△同十五日、同郡山崎妙行寺擂鉢田源次郎宅に於て第二回幻燈應用講演會を開催す。説明者竹内觀領、山田誠心、長岡青鹿、木村令快、海老澤乾樹、斉澤志正、參聽者二百名。△同十八日、同郡豊田村小林大乘寺に於て第三回幻燈講演會を開催す。宮川、山田、海老澤、竹内、斉澤の五師熱心説明の任に當る。參聽者百餘名、△同十日、同郡東郷村北淺龍福寺に於て七淺詠奏會を開催す。法華經と青年會、小川玉秀。修奏と日蓮主義、初芝智泉。現代思想に就て、武田觀龍、聽衆五十餘名。

神戸明石地方

△**神戸のはちす婦人會** 十月十日統一團神戸支部に於て第四回講演會を開く、家庭に於ける應急手當、桂田病院醫員津堀保氏、佛陀の婦人觀（二）、熊井本光師。

△**神戸の日蓮聖人龍口法難會** 十月十二日統一團神戸支部に於て開催す。日蓮主義者としての覺悟、中原龍太郎氏。聖日蓮の背景たりし鎌倉、梅室榮太郎氏。信仰と反省、栗原民男氏。龍の口法難の表裏、熊井本光師。純信の聽衆早くより堂に滿ち、熱心なる講師の一言一句をも洩らさじと耳を傾け、御法難當時を偲びて感慨無量なりき。

△**同二十日** 明石市公會堂に於て、同市智識階級の爲めに公開講演會開催。佛教大觀（續講）、本多貌下。

朝鮮釜山

△**十月十二日** 日蓮鎭仰天晴地明會秋季大會を、釜山大龍町天晴地明會に於て開催す。思想問題の歸結と第一義諦、横山惠正師、外數氏の講演あり、聽衆二百有餘名、盛會なりき。

△**毎月の例會** 毎週水曜、日蓮聖人遺文講義。毎週日曜、法華經講義。第一第三日曜、婦人會修養講話。

日經上人終焉地建碑除幕式

日經上人は北陸教化に偉大なる功勳のあつた人である、昨年が其の三百年忌に相當するので、富山縣婦負郡音川村外輪野鼻鉄坂にては、往年日經上人を供養した若瀬彌三次郎氏が獨力にて記念の堂宇を建立した。此の繁蹟へ本年春三月、福井縣足羽郡正村南居妙正寺の佛教青年會員が、住職梶木顯正師に引率せられて參拜したが、繁蹟の荒廢を眼前に眺めて感慨禁ぜず、佛教青年會員が發起になつて三百年忌を記念する爲に經師の碑を建立せんと企て、住職及び會長小竹善右衛門、飛山五右衛門、岩崎一男、中山金十郎、中山彌太郎氏等の斡旋により、遂に近日に到り全く其の工事を竣成した。碑の正面は本多管長貌下の筆になり、兩側面は大迫陸軍大將、佐藤海軍中將、蓬石は野口日主僧正の揮毫である。吉辰を卜し、管長貌下の親臨を願請して、九月廿五日外輪野鼻鉄坂に於て其の除幕式を擧行した。

午後壹時より除幕式法要を厳修す。式場に詰かれんとするに際し、一天俄に掻き曇り、驟雨淋然として至り、剩へ雷鳴さへ加はり、轟々たる響きは地軸も爲にさけん計り、國民思想の頽敗、頗る驚倒實年の狀況に類似し、日本國の危機は日に月に迫り來る、國民教化の大本を明示すべき大正安國論の述作せられ、國家興廢の大事を負荷すべき日本國の柱の出現すべき今の時に、第二の日蓮と稱せられて、小雖四ケ度、大難數知らずと聞えし常樂院經師の建碑除幕式を擧行せんとするに當り、此の瑞相あり、天意豈徒然ならんや。篠つく雨を冒して大導師貌下には靜に墓前に讀經あり、青年會代表梶木住職の奏恩慶讃文、若瀬彌三次郎氏の祝辭ありて式々終り、紀念撮影後、午後二時半より若瀬氏宅に於て大講演會開催、窪田布教師、石井管事の請請に次で、本多大僧正貌下の御親教あり、午後五時閉會す。來聽者五百餘名。又當日參拜の爲に福井金澤地方より集まれるは、青年會員全部の外に、當俗約五十名を超へたりと。

自慶會支部月報

△九月十三日、名古屋市豊田紡織、女工一千名。三つの自覺、本多貌下△同日、鈴木ヴアイオリン、千二百名。思想戰の現狀、本多貌下△同十四日、日本車輌、八百名。國民の進路、本多貌下△同十五日、機器製造所、四百名。思索の標準、本多貌下△同十六日、愛知時計、九百名。思索の標準、本多貌下△同日、淺野木工、二百五十名。先づ心を護れ、本多貌下。心眼を開け、山内講師△同十七日、熱田兵器、一千五百名。東西道德の換本思想、本多貌下△同日、山岸製材、三百五十名。日本人の長所短所、本多貌下、△同十八日、大阪市安治川鐵工所、三百名。眞理も事實も、本多貌下△同日、住友倉庫所尼崎工場、社員二百名。思想問題の歸結、本多貌下△同二十日、明石市公會堂に於て大會。國家の現狀と修養の方針、本多貌下△同廿一日、神戸市三菱倶樂部、國家の現狀と修養の方針、本多貌下△同廿二日、神戸製鋼

所、法華經の綱要、本多殿下△同日、縣立工業學校、主として川崎造船所の職工一千名、國家の現狀と修養の方針、本多殿下。

千葉縣濱野村本行寺諸堂營繕落成式

千葉縣七里法華十數萬の檀信徒を結束して、之に正義の信仰と、熱烈なる國家的觀念とを打ち込み、本宗信徒の團體的偉力を發揮せしむる時、大事以て成すべしだらうと思ふ。それは思想の上から國難襲ひ來らんとする今の時、殊に大切なる浮業ではなからうか。かゝる意味に於て、日泰上人千葉縣開敎の根本道場なる濱野村本行寺の營繕の事業殆ど完成し、九月廿七八九の三日間に亘り管長殿下親臨の下に盛大なる法要を嚴修し、數萬の信徒四方より雲集して、口々に題目を唱へ、聲々に宗祖と泰師とを渴仰したのは餘程大きな出來事ではなからうか。左に大要を摘載する。

○初日　午後二時法要、山主國友日斌僧正導師として清素七十之に隨ひ、天童三十、妙樂と共に娑婆即寂光土を現出す、午後關田僧正野澤少將等の講演相次で法話夜に入る。

○中日　管長殿下には午前十時濱野驛に到着せらる、奉迎と拜觀とを兼ねた數千の群集は、花車を練り、團扇太鼓をたゝいて驛前に殺到した、村から驛迄の路は唯見る人と花とに埋められて稀有の盛況であつた。そして僅か數丁の距離に、而かも一時間を費して殿下入山の御姿を拜した、以て混雜の狀を知るべきである。此の日暴風雨の警報ありしに係はらず、天氣清朗、主催者は感激して之も泰師の靈感であるとつぶやいた。遠近よりの老若雲集する者數萬、一萬坪に近き境内立錐の餘地なく、千葉署より應援の巡査は感激の語調に獨語すらく「空前なり」と。午後一時秋葉布敎師、野澤少將の前講に次で殿下の御親敎あり、餘興は一時に鳴りを沈め、消防は四方に馳せて子供の駿ぐのを止めた、佛日高く照して微雲動かず、人は停立して斐語なし、慈音朗然として屋外に達すれども傾せざる者猶萬、僅に譯題を聞いて歡喜する者あり。午後三時法要、殿下は隨喜の僧員百餘天童五十を隨へ、大導師として親しく慶讃文を朗讀せらる、法要の式次昨の如く、晝より夜深更に至る迄、笹川僧正武田文學士栗原布敎師等の講演あり。

○結日　未明より微雨あり、午前十時國友山主を導師に、法要等前日の如し。

○うぐく寺　帝都よりうでき來つて盛典に連り、早天より深更に至る迄三日間に亘つて、或は講演に、或は講談浪花節に常轉法輪の大活動を演ず、又餘興日蓮聖人の活動寫眞は、千葉縣の名物唄題目と並んで一段の異彩を放つた。この盛儀から顧くは知法思國の大活動の生れ出でん事を。

慶讃文

（前略）謹で案ずるに當如意山本行寺は七里法華の根本道場にして、實に檀大會都心了院日泰上人の開創に屬し、我國本法華宗内に於ける尤も由緒正しき靈刹たり。

指を屈すれば日泰上人の遷化より今年は四百十有七年に相當す、玆に當山住職檀徒力を戮し、且つ有志の寄捨を集めて諸堂營繕を計り、今や大體竣功を告げ、本月二十七八九の三日を卜して大法會を嚴修し、以て落成式に擬し、日泰上人の報恩と施主の祖先の追薦に備へ、併せて宗風の發揚に資せんとす。

此日天氣清朗にして清淨の僧俗男女相集まること雲の如く、其數無慮五萬に達すと云ふ、以て盛況の一斑を知るべし。其れ如斯四衆の雲集するは一は泰師遺德の致す所なるも、復以て時代の轉換して日蓮主義の復活の機運至れるを見るべし。謂ふに今や我國の現狀は酷だ鎌倉當年日蓮聖人出現の時に似たり。内には民心の歸正を促し、外には國威の擴張を期し、立正安國の大旗を掲げて國民に大自覺を起さしむべきなり。此時此際先師七里法華講創の大導師日泰上人を追懷して弘敎の精神を新にし、宗風振起に資するは、眞に一大美擧と謂つべし。此の法莚に列して歡喜に堪へず、所思を列ねて謹で慶讃の誠意を布く。

（後略）

千時大正九年九月二十八日　　顯本法華宗管長大僧正日生

草切投

謹告

掲載したる記事充溢して紙面の狹隘を感ずること切、玆に大正十年の新春と共に本誌の刷新擴張を行ひ、以て國民敎化の大本を摘示し、國民思想の趨歸を指導する上に、一大奮鬪を試みんとす。その結果明年一月號より本誌の定價を改正致します。

團體購讀に對しては、布敎宣傳費援助の意味に於て、その事情に適應する樣に充分の割引を致します。

改正　一部金參拾錢、郵稅金壹錢。

定價　一ヶ年前納金參圓參拾錢。郵稅共

世界的混亂の人心を整し清淨光明の日本を開闡する唯日蓮聖人耳

田中智學先生監修 ◎山川智應居士 長瀧智大居士 主任編輯

本化聖典大辭林

（ホンケセイテンダイジリン）

特價提供

（内容見本進呈）

十有五年心血の瀝！

生存競爭と相互扶助とは人類を進歩せしむる内外表裏の二原因也若し競つて其一を濫用せば必ず「進歩の退歩」を免るゝ能はず。資本主義と帝國主義とは生存競爭思想の果實、社會主義と人道主義とは相互扶助思想の對抗的確進也此の兩思想が相反的に融合一致するに非ずば人類の眞進歩眞幸福は畢竟して來らず。此の眼本的融化を漸進的に教ふるもの世に唯二あり曰く法華經曰く日蓮聖人曰く日本國論これ也是實に現代未來の世界を救ふべき精神的源泉也求めよ！諸君。道は外に有らず内に在り。

精神界空前の貢献！

是日蓮聖人遺文の百科辭典なり現代思想解決の寶庫を開く秘鍵なり

日蓮聖人の遺文四百篇古來の註釋數十家浩瀚敢浸容易に要領を得難し本書は遺文中の語句一萬六千項を摘錄し或は簡明適切或は詳細周密に徹底的解釋を施し遺文讀者に寸毫の遺憾なからしめし者現代日蓮主義第一の權威田中先生監修の下に兩主任以下の各員が十有五年の苦心と十數萬卷の參考書五萬金の巨資を投じて漸く成れる菊版には一萬頁を超る大著なり 一人の偉記の書の爲にせる一大辭典は明治大正出版界空前の偉觀今や製版完了の時恰も聽口法難六百五十年聖壽七百年の二大聖辰を迎ぬ仍て率祝の爲め記念特價提供を行ふ諸の聖人崇拜者研究者寺院學校圖書館藏書家及び政治實業教育宗教思想文藝等の諸名家が來上必ず一本を藏有せられんことを希望す。

四六倍版三千二百餘頁全部三冊函入堅牢美裝

正價金六拾圓

特價

一時拂金五拾圓

三回拂金五拾五圓

六回拂金五拾七圓

十回拂金五拾八圓

特價申込期限十一月廿一日

送料内地一圓新領地海外貳圓

申込は必往復葉書送金は常方通知後

發行所 東京下谷鶯谷 師子王文庫 （振替東京六六七番） 發賣元 東京下谷 國柱會

大阪 東京 東京堂 東海堂 王冠堂 北隆館 上田屋 須原屋 東京 都 村上 大阪 加賀

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓 金壹圓六拾錢
○日蓮主義初歩 金七拾錢
○日蓮主義 金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義 金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要 金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激 金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用 金壹圓八拾錢
○東洋文明の權威 金壹圓八拾錢
○國民教化 金貳圓貳拾錢
○法幢 金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶 金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經 金貳圓貳拾錢
○聖訓要義 卷一、二、三、四、五、壹部金壹圓七拾錢 卷六、壹部金參圓
○開目抄詳解 上卷一部金貳圓
○聖語錄 金貳圓貳拾錢
○優婆塞戒經通解 金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義 上卷下卷各一部金參圓四拾錢 送料一部金參拾錢
○大藏經要義 送料一部金參圓四拾錢 送料一部金參拾錢
○法華經要文 送料一部金貳拾錢 上卷既刊 送料不要 上製金五拾錢

○思想の惡化善化
○人類文明の基礎
○正しき理解と信念

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川町妙國寺内
大藏經要義刊行會
振替東京三一一五九六番

各一部金六錢百部以上金五錢の割 送料一部金貳錢

統一定價			
一冊	金貳拾錢	送料一錢	
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共	

廣告料			
一頁	金拾圓		
半頁	金六圓		
四分ノ一頁	金參圓半		
前金の事			

大正九年十一月三十日印刷納本 大正九年十一月一日發行（第三百八號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人 國友日斌

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人 鈴木日雄

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 三秀舍

名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺内
發行所 大藏經要義刊行所 振替東京五一〇七一番

紅一編輯所

不許複製

目次

日蓮主義と實際問題（時言）……本多日生
一、民衆運動と節制　二、ストライキと暴動　三、民衆運動と意氣地　四、日蓮主義と暴動不認　五、人道正義の甘言　六、日蓮主義の深刻　七、佛教とその包容力　八、商工業者の不明　九、社會の平和と宗教の復活　一〇、社會の平和と民衆教化　一一、社會の平和と高等政策　一二、日蓮主義の特長
聖德太子の憲法に就て……本多日生
世の中と佛教……野澤悌吾
佛教信仰の正統……本多日生
佛教徒の道念……本多日生
日蓮上人教義綱要……井村日成
私の婦人觀……安西千賀夫
記事、報道十數件

第廿四年十二月號

統一第三百八號　明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年十一月一日發行（第一卷一號一日發行）